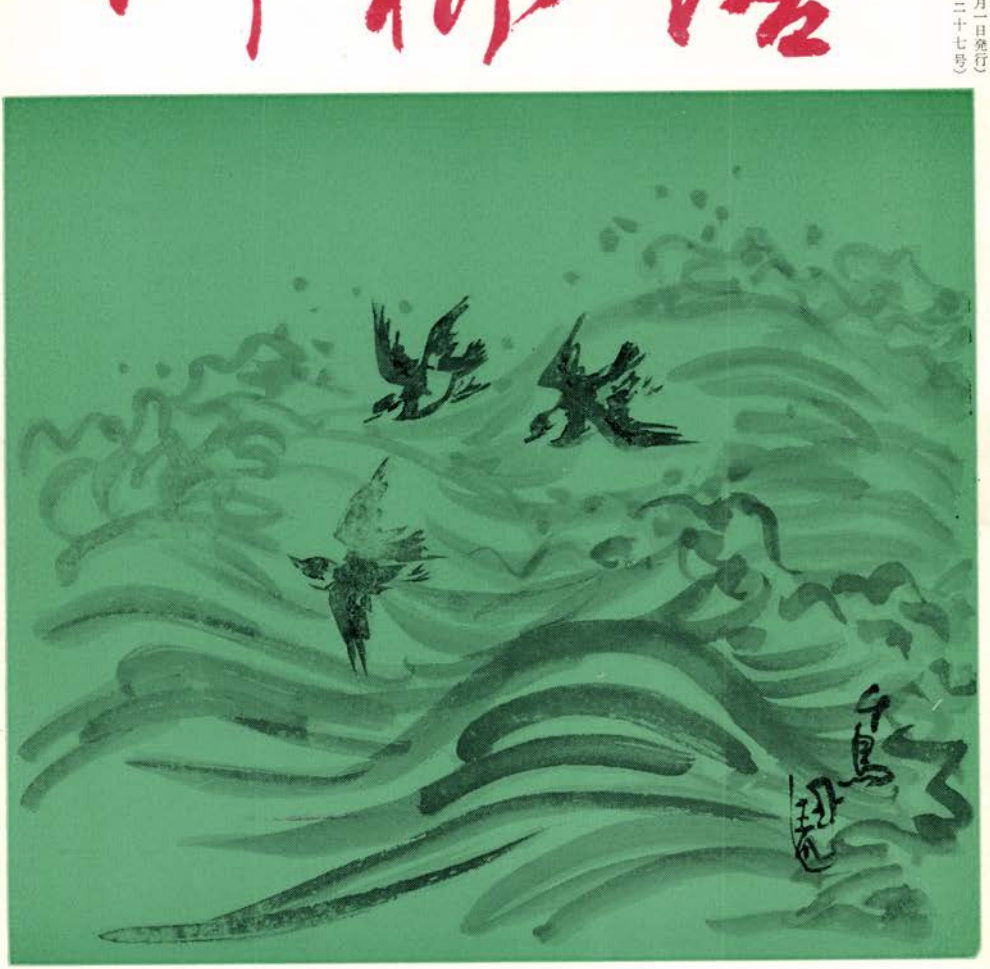
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十二年十一月二十五日 印刷
昭和四十二年十二月一日発行 (毎月一日発行)
(第二十七号)



No. 27

特集・語味の市

十二月号

えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛

超特撰
（化粧ケース入）
一、八リットル詰・一、三五〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘 西宮酒造 醸

国立公園 奥新和歌浦
・雑賀崎

国際観光旅館
うおまたろ
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3564

透きとおる老僧の眼によりつけず

街路樹にささやく秋のシルエット

整いすぎて八百長演技惨めなる

言わんこつちやないキヤラメルへ総入歯

はいおつぎこれで孫がよつたりめ

中島生々庵

今月のことば

◎いい時候になって来たと思ったら十二月号である。今年の日照りにはほとほと弱ったが、昨今食欲の秋を迎えるようになってご同慶である。関西附近は例年松茸のまっさかりの頃であるが今年はそうはゆかぬ。あわれな不作で味も落ちた。これは東京で聞いた話だが、ある人が田舎に帰省して本場でもあるし土産に松茸を持って帰った。途中立ち寄る用が出来て籠というわけにゆかずトランクに詰めて数日後帰宅した。出してみるとむれたのか白いうぶ毛が一面についていたが気にせず焼いて食べた。ところが、一時間もせぬ間に夫妻とも全身フラフラ。医者だ薬だの大騒ぎ。隣の奥様曰く、昆布で佃煮にすれば大丈夫よ。棄てずに私に下さいなというわけで叮寧に煮た。東京人には豊作の年でも貴重であるから当然の話。再びところがである。これは如何。松茸はおろか、昆布まですっかり、影も形もなく溶けて終って、結局ガス代と醤油代が残った。という話。

◎句になれそうで、今しきりに考えている。

（十一月号〝今月のことば〟の6行目を「或は達磨の」と訂正。

川柳塔十二月号

川柳塔十二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……中島生々庵…(1)
川柳塔…(同人作品)……中島生々庵選…(4)
師走雑感……北川春巣…(2)
堀口大学氏と語る……阿部佐保蘭…(38)
近詠……麻生葭乃…(41)
川傍柳初篇研究…(五十四)……(18)
前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫
秀句鑑賞…(前月号から)……後藤梅志…(20)
徐文長の挑……東野大八…(44)
豊臣秀吉……(二)……冨士野鞍馬…(42)
漫才・ニワカ・川柳……光武弦太朗…(27)
盲目抄……高鷲亜鈍…(37)

私論・柳論

師走雑感

十一月三日の文化の日、大谷竹次郎氏の署名入りで「顔見世」の広告が新聞に出ていた。顔見世は、毎年十二月一日から京都南座で行なわれる文字通り東西名優による大歌舞伎で、今年も芸術院会員の寿海や歌右衛門の他、そうそうたる連中が出演している。「気の早いことだな」と思って見ていた。南座では十一月二十五日になると、その「招き」が飾られる。この日から京都には「師走」が来る、といわれ新聞にも毎年その写真が載る。年によると小雪がチラつき、また舞妓がそれを見上げていることもある。数年前までは私も顔見世を見に行き、街の師走のあわただしさを忘れて、のんびりした歌舞伎の舞台を一日楽しんだものであった。しかしここ一、二年は、何だか雑用が多くなって、顔見世とも縁が遠くなり、広告のキャストや新聞の劇評を読んで、師走気分を味わっているという状

語味の市……（同人特集）……（22）
津秋　六花・中川　滋雀・戸田　古方・野村　味平
川岡霊眼子・吉田　水車・不二田一三夫
近作柳樽……川村好郎選…（28）
雅号ぶっちゃけばなし……内藤きさ子…（61）
さりげなく別れる……前田芙巳代…（49）
初歩教室……菊沢小松園…（46）
水谷鮎美さんをしのぶ……吉田水車…（43）
いずも川柳大会……王紫…（57）
大萬川柳「ストロー」……清水白柳選…（48）
★柳界展望……（薫風）……（52）
★本社十一月句会……（庸佑）……（54）
★各地柳壇……（文秋）……（58）
「二等車」……辻圭水選…（50）
一路集「歳暮」……河井庸佑選…（51）
「やりくり」……若柳潮花選…（64）
★編集後記……（白柳・一三夫）…（64）

態である。

「師走」ということばは、忙しい十二月にいかにもピッタリという感じだが、その忙しいものに、もひとつ「ジングルベル」がある。もと住んでいた旭区の家から勤務先きの病院へ通うのに、天神橋筋という商店街を歩かねばならなかった。ある朝、人通りもまだまばらなのに、ふいにこの「ジングルベル」の音楽を聞いた。気が付くと、それは十二月一日の朝であった。商魂のたくましさを思うとともに、「師走」の足音を感じたような気持になったことを、今でもハッキリおぼえている。「ジングルベル」はこの日からクリスマスまで、街の人々を追い立てるのである。

「師走」といったのではピッタリ来ないが、「十二月」といえば、われわれサラリーマンにとって嬉しいボーナスが頭に浮かんで来る「師走」はいたる所に句の素材がころがっている月だと思う。

ボーナスはオール予約の十二月

（北川　春巣）

川柳塔

中島生々庵選

大阪市　中川滋雀

一粒ずつ値上げの米だ噛みしめる
乾柿にされるさだめの色に熟れ
葬式の日までマスコミ取り囲む
乳母車はみ出た孫に案内され
過去語る女は真実漂よわせ

高槻市　傍島静馬

金のこと以外は話のわかる父
家中でおやじいちばん物静か
買う方が得心してる売り上手
発車間際になってパチンコはいり出し
旦那ともつかず情夫ともつかず

豊中市　戸田古方

あるものがあるので蟻の列つづく
煩悩をすてきってなどいなかった
ぼんぼんの慈悲もここらという限度
断水もするやろ人の知恵やもん
人ぎらいになってそれから猫屋敷

岡山県　浜田久米雄

冷蔵庫から湯豆腐の種を出し
空瓶をかためて売った十二月
十二月急げ急げと月が冴え
十二月払えぬ顔と相対す
締めくくるつもりで十二月を歩き

大阪市　本多柳志

読みすてるみくじ気になる文字があり
話し合う度にプランが小さくなり
出来すぎて国をなやます田が刈られ

地下へ店出して番地のない名刺
ストローのやがて別れる時間表

東大阪市　久米奈良子

豆秋さんを偲んで

病中を訪うてひととき水中花

おんな放談（二句）

字あまりのようなひな子の舌足らず
気強さをひとり語りの糸にのせ
入れ替えた心がまたも入れかわり
秋風の吹かれるままにおみなえし

高槻市　若柳潮花

呼びとめて五六歩待たす顔馴染み
逢う恋と別れる恋を見る南
ローソクの焔が揺れる地唄舞

帰郷して（二句）

まだ露の乾かぬ萩の枝を折り
肩先へ噛みつきそうなザクロの実

大阪市　正本水客

野天風呂秋の心をみだすまじ
こんにやくの味にも秋が深くなる
歴史のなかにたたずんで秋を聞いている
ひらひら泳いで生きてるのを確めてみたい

秋篠寺

塔の跡の茂みは秋の湧くところ

大阪市　橘高薫風

信濃の旅（二句）

霧のダム紺の背広の龍神か
幻の女の息の霧の音
噴水の形変らず恋終る
初冬の恋鶴の面着て逢いに行く
お隣りと壁一枚の夜が長し

大阪市　後藤梅志

鳴り止まぬベル踏切りをあとにする
江戸っ子の勘がピリピリする師匠
しかってもしかってもついてくる仔犬
歳末に盗られた記憶だけのこり

悼　吉田前首相

国葬の日よワンマンのかおかたち

大阪市　不二田一三夫

花のいのちうらやむ老人ホーム
足の小指をこんなに虐げて
ご注文カレーライスとライスカレー

寄席（二句）

奇術師が家庭で名刺見つけられ

子が嫁に行くのでコンビ解消し

大阪市　今西章雅

けちんぼにつれあり市電待っている
しぶちんに成ったと嫁いだ子へ安堵
二日酔かんざの顔で起きて来る
これと云う用もないのに不精髭

大阪市　西森花村

交通マヒ崩安心して渡り
食堂のツケ食欲の秋だった
不本意な別れタバコとマッチの火
おやすみも言わずにその日母は死に

岡山市　服部十九平

一応は辞退するのもテクニック
仰臥五年ベッドを下りたいだけの欲
湧く雲に水平線がひん曲り
司会者の自信サクラの準備あり

倉敷市　木村長三郎

としよりの日に老人が反発し
としよりの日をちょこなんとせまくおり
欲をいいなさんな　としはいくつぞ
梅の詩の版画一幅だけの春

青森市　工藤甲吉

くくられてゆく人妻や子はいかに
廃船に吹く秋風は泣いている
九月十五日孤老に杖があるばかり
寝ころんでいて体育の日にそむき

鳥取市　河村日満

凌ぎようなりましたなと嘘して
水虫を憎さ百倍ほどひねり
灯下またコツンと柿の落ちた音

二男就職試験に

書類審査だけでとおったあっけなさ

芦屋市　丸川初甫

阪妻の法要一句

美しき哉妾腹の子と並び
財産を一人暮しは腹に巻き
洗面器入院記念をまだ使い
愛称のパパでパトロン親しまれ

豊中市　寺田花宵

名月に邪魔な四角いビルディング
傘借りに寄って呉れるも喫茶店
貸し傘がボチボチ返えるほど馴染み
おたがいの嘘を見抜いた瞳の笑顔

島根県　藤井明朗

追憶は消え今日の幸かみしめる

大安の見合いどちらも首尾を待ち
耳遠き長寿しずかに国思う
草相撲行司の愛嬌差しちがえ

倉敷市　本田恵二朗

日本地図にらんで台風考える
品行方正おもちゃみたいな家を建て
視線の矢ぐらいに犯人たじろがず
秋冷の玉砂利老母と歩をあわせ

大阪市　金井文秋

熱帯魚みんな死なせて金魚入れ
ご主人を死なせてからの金を貯め
愛情のかけらを他人の前で見せ
君とこも閑かそうかと気を休め

門真市　福島鉄児

糖尿病と診断される（四句）

あれもあかんこれもあかんでどないしよう
生きて行くだけの食事のむなしさよ
いっそ何んでも食べたろかと思えども
なつかしいものに砂糖の甘さかな

名古屋市　吉田水車

朝顔も初めのうちは数をよみ
天体も住みにくいのか流れ星
妻病んでなるほど困る台所

鮎美君を悼む

君もまた恩師のもとへ急ぐのか

大阪市　児島与呂志

森の宮谷四開通（一句）

サービスは大阪弁で開通し
さからわず育ててさからわぬ子に育ち
ババ抜きを承知で息子に似合う嫁
気にかかる言葉残して欠伸をし

愛媛県　村上旭童

旱害

ホース屋にホースがきれて照りつづく
採算はもう言うとれぬ水になり
秋晴れの何がうれしいアナウンス
トラックへ積むと嫁の荷あっけなし

鳥取市　藤本礎山

子沢山成功する子があると決め
脚線美モンペに包んで農に生き
三十年昔は妻も伊勢小町
無欲ではないがお金が寄りつかず

倉敷市　水粉千翁

蜃気楼もう建てている青写真
虫の道ゆっくり月に追い越され
歌しどろもどろあなたは泣いている

運命をこんなに思う墓参道

岡山県　藤原秋月

日めくりが薄着になって行く師走
明日がある来年がある愚痴るまい
金策はなし偽札はようやらず
思うことない狂人を羨やむ日

大阪市　石倉旅風

とっつきのわるい男とうまが合い
趣味に事よせて物売る手をつかい
台風が外れたと言っている小言
言い訳をする間惜しさのたばこ喫う

熊本県　有働芳仙

外交用スマイル鞄に詰めて発ち
御指命にしてねと伝票切替える
千円がくずれぬ朝の喫茶店
世話好きが役所で一日棒にふり

香川県　三井酔夢

誰よりも鏡に嘘を見抜かれる

二十年振り同窓会（三句）

風雪に堪えた丸さか如才なし
往年の才女も物価高にふれ
最高の身なりで夫のことふれず

大阪市　川口弘生

犬の用飼主てれくさそうに立ち

伯父古結真直氏の一周忌

孫達のヤンチャが供物の一周忌

従兄弟林康二君の結婚式

新郎には写真屋一寸触れただけ
一番に来た親戚が末座に居

竹原市　山内静水

貸し借りを身につまされて秋深む
自転車に乗れば気になるらしいミニ
今更の叙勲悪夢がよみがえり
油虫の不運は妻に見つけられ

岡山県　長谷川紫光

親心知ってるらしいつづり方
ネオンに灯ともれば古都の貌でなし
死の床を励ます虚しい語をさがす
トンボすいすい腕白の竿をさけ

神戸市　仲どんたく

秋の影老婆と孫と天王寺
子の話ママホステスは酌ぎ忘れ
九月の蚊これ今生の名残にと
定年のこれから温室出る寒さ

奈良県　草深酔升

お月様二ツに見えるほどに酔い
こう出ればこう来る筈の駒が来ず
流行へ疎遠の妻がいじらしく
整形の看護婦長の低い鼻

守口市　羽原静歩

ふり向けば敷かれたままの五十年
フーテン族ああ日本は平和なり
理路井然明治百年行きづまり
ホーマーへぽっかり浮いた雲の峰

竹原市　小島蘭幸

ラブレター切手逆さに貼ってみる
もう一度念を押したら怒るなり
履歴書へたったひとつの趣味でよし
会えばすぐ喧嘩するのも恋のうち

ハワイ　築山快夢起

ヘンリー・カイザー翁逝く
寿命には勝てず事業の鬼は逝き
夏季講習フラも課目の中に入れ
アクセサリーの肩書がものを云い
世故に長けおつむの方もらしく禿げ

室戸市　奴田原紅雨

汐騒の音うたがえば果てがなし
いつか来た道本心を抱いてゆく
つまりまあ亭主のほかは他人なり

大阪市　太田良子

思い出がひろがり虫干しはかどらず
飛入りが出来て私に当らない
家中をかきまわしといて娘はデート

西宮市　若林草右

汗水をたらして仕事何もせず
水泳禁せめて足だけつけてみる
暑いですネと犬も舌を出し

大阪市　山川阿茶

金魚さえ乗る飛行機にまだ乗らず
高い靴買うてタクシー代嵩み
眼をつむりのむ青汁に意地があり

京都府　大鶴喜由

ほめられた男を探し酌ぎにくる
借りもせず貸してもやらぬ十二月
ふたありのサラリーたした設計図

岸和田市　内藤きさ子

いつまでも通した意地にけつまずき
田を売って男に男の道があり
ほほ紅を秋の深さの色に刷き

大阪市　大坂形水

カーテンの汚れに気付く風邪の妻
体操の手が電灯の傘殴り
折込みの広告バサッと落ちる嵩

藤井寺市　西いわを

易きに就く老人の処生観
波の輪が元へ戻るを視つめてる

師を偲ぶ

師の姿あの辺りなり雲の峰

大阪市　市場没食子

高血圧が飲み低血圧がよう飲まず
みごもって挙式へ親がさあ忙て
大阪の祭りなつかし鱧の皮

愛媛県　渡辺暁童

旱天のお陽さま煙ふきそうな
仏だんもあつおますやろあけときま
日当のほしい婦人会とはなりぬ

呉市　林野甦光

マスコミに騒がれ大器伸び悩み
これ以上待てぬが寄った十二月
つくだに屋妻が不存と知っており

岡山県　大森娯句楽

雨を乞う眼一様に雲へ向け
来客へプライドがあり子を泣かせ
燗つけて欲しい銅鉛の湯がたぎり

下関市　桜川不水

終点のない貧乏の蜆汁
雲水も真っ赤な柿へ出来心
三度目のおじぎは逃げる腰になり

大阪市　西出一栄

幻滅は櫛に白髪のからみつき
名月が素通りしていく下戸の窓
純愛へ巧言令色不必要

岡山県　直原七面山

奢り返えす目算もなくついて行き
ネクタイを褒めて男の気を外らし
御都合があって素知らぬ振りをされ

枚方市　宮川珠笑

行末は云わず日雇今日も掘り
団楽を憎む夢もあり受験生
倒産へ百鬼夜行の債権者

笠岡市　松本忠三

ひとごととなると興味の顔が寄り
秋冷の候を浴衣でぶらりと出
松茸のにおいもかげず祭済み

兵庫県　河原みのる

町議選

彼処に二票ここにも三票稲を刈り
山を崩せば何んと土の多さよ
政治手腕あとは野となれ借りること

今治市　越智一水

風と樹と空と愛している孤独
泣いている事故へマイクを押しつける
長靴の女が稼ぐ霧の朝

熊本県　楠田英子

スランプの壁のあつさにいどむ宵
ヌード人形悠々とかつがれていく

労演を見て

熱演に酔うたか歩いて帰りたく

松江市　中川晃男

観光バス日本の秋の色を縫い
ミニスカート少しは足が長く見え
大安の翌日神様肩がこり

大阪市　河井庸佑

出るだけの声で親子してどなり
ことりともさせずお隣仲がよく
妥協することを知らないふしあわせ

宇部市　平田実男

義理で来た手伝いへ日が長過ぎる
笛吹けば踊る阿呆の中の僕
妻抱いて踊れば無性に肩が凝り

宝塚市　中村ゆきを

同窓会自慢話が奢る破目
じいちゃんがまるで主役の初誕生
キッチリと靴をそろえる子も混り

諫早市　川岡霊眼子

蚤一匹肥満の妻に立ち向い
臍の垢ほじり病床に早や長し
日傘さしかけられて不図思うこと

鳥取県　清水一保

修繕のまだ効く身体カメラ呑む
太陽が明日もあるから嘆くまい
ベトナムも物価も知らず柿熟し

兵庫県　遠山可住

胃かいようもう飲めるだけ飲みました
役所新築だんだん庶民へ遠ざかり
ライバルに白髪見つけた淋しい日

奈良市　宮口笛生

人のいい田舎を走るバスに乗り
二時間に一つのバスを便利がり
この辺り松茸取れた住宅地

鳥取市　森本法泉子

夫人同伴むこうが来るからこっちも行く
信号に荷馬車ポカポカ慌てない
おない年いつか専務に甘えてい

西宮市　樋口舟遊

恋の血はたぎる男のエゴと云う
二枚貝私は殻をはずしたい
散り果てる落葉へおんな心かも

大阪市　水谷竹荘

万歩計さげて長生き自慢する
顔利くとこないかと二次会三次会
珍客へ次ぎつぎ見せる子沢山

玉野市　小谷仙山

しっかりやれやって来ますと汽車の窓
溝掃除町内会の賑やかな
手のとどく枝から柿がへってゆき

宝塚市　小畠無聖

公害の音絶えてから月も冴え
ただならぬ音はゆうべの続きらし
プライベートあたりさわりのない返事

ホノルル　加川カロ女

も一人の自分がおって戸惑いし
再婚のママは他人のようにみえ

噴墓の地定めて布哇よいところ

倉敷市　野田素身郎

首切った奴に逆転打をうたれ
悪友の助言悪知恵の域を出ず
親心旅行鞄に詰めきれず

富田林市　川端東雲楼

しあわせは老後に国の後だて
情熱のペンよ枯れるな幾山河
心なしかアルバムの亡妻かすれて来

和歌山市　二越俊爾

養老院乳のみ子も居る犬四匹
仏様のような人だと貧乏し
教わった押の一手に失敗し

善通寺市　岡田拳法

直ぐ怒るタチで胃散が手離せず
妻にない魅力に道心揺さぶられ
保存会の名で細々と祭獅子

岡山県　横山一声

交通禍ねたに保険屋がねばり
借金が重なり度胸もついてくる
気安うに借して高い利子をとり

堺市　新谷笑痴

博多に旅をして

玄海が生簀と博多の味自慢
玄海の風でまたたく中州の灯

広島に旅をして

原爆のドーム目当に地図拡げ

大阪市　福井野迷路

大出血よくよく見ればパチンコ屋
野犬狩りフーテン放置猿餌つけ
尻に敷き子供は二人ばばは抜き

兵庫県　大江秋月

稲の出来ほめて平和なパトロール
額の位置替えてもせまい2DK
エプロンの侭で夜勤を見送られ

和歌山市　西尾公作

サングラス掛けてヌードの画に見とれ
付けまつ毛はずし昼寝の夜の蝶
肩書の多い名刺で肥えてはる

平田市　久家代仕男

御隠居の日課につぼみの固い菊
この年で見合い気どらぬ気を使い
行楽の群を散らして救急車

大阪市　西川誓二

夏草の茂みに地蔵首を出し
バスの窓スレスレのとこに柿が熟れ

眉をひくその手で悪どい手も使い

和歌山市　土谷城石

税務署は切手貼る手間抜いて来る
会って見りや名刺程でもないお人
障子をば外して嫁荷唄い込む

大阪市　福井多蘭子

ニュータウン誕生（一句）

土地買いに来たらし納屋の隅に逃げ

娘を嫁がせる（一句）

嫁ぐ娘へへそくりの額まだ云わず
るんぺんのひる寝職安の玄関

東大阪市　本多清人

世話をする人あり地蔵美しい
ワンマンカー鏡鏡に囲まれて
ターミナル急がぬ足と急ぐ足

京都市　松川杜的

秋の蠅編棒の先で押えられ
螺旋階段ハイヒールに振り向かれ

結婚の娘に贈る

人生航路悲しい時は琴を弾け

高石市　谷沢好祐

知らなんだことで課長は済ましとき

小豆島行

捕獲犬のように二等は詰め込まれ
大阪の石の残りが名所なり

倉敷市　井上旭峯

松江梅里氏を悼みて（一句）

何もかも一流だったと惜しがられ
目的を問われて無心口ごもり
母に似た仏に逢うた羅漢堂

倉吉市　奥谷弘朗

女房の福相の耳をまだ信じ
こうなれば何とかなるだろ主義で生き
やり直すだけの勇気が欠げている

出雲市　原独仙

四十周年記念大会白柳先生を迎えて（一句）

肩揉んで貰う気持の柳話聞き

退職記念旅行（一句）

老妻と旅行善意の席に座し
妻曰く娘が女になりました

岡山県　池田古心

行く先は此処と我が墓碑ドカと据え
黒い霧小さな風にも怯えてる
よく飲んで人にも飲ませ財を成し

鳥取県　森田布堂

秋深き城趾に落ち葉浴びて立ち
日曜の大工疲れという遅刻
今捨てたゴミかきわけて探しもの

八代市　沢田平八

台風は雨を連れずに走り逃げ
チビチビと値上げの酒の味まずし
課長さん今日の笑顔は何ですか

ハワイ　羽佐間柳葉

金の世に素性を語る阿呆らしさ
一線を引いて自分を孤独にし
来客に入歯忘れて出てあわて

姫路市　隠岐不酔

お便所を聞けば手洗教せてくれ
お金さえあれば吃でもちんばでも
朴下駄の写真これが僕かいな

高槻市　山田季賛

西陽落つ工事場へ秋の風
割石の一つ一つにある力

岡山県　田村藤波

無医村に診療所と言う灯がともり
百歳にも一つ生きたい生かせたい

伊丹市　小川静観堂

願いごとどの神様もそっぽむき

暴徒学生諸君ヒゲでも剃りたまえ
加賀市　那谷光郎

今年また門衛自慢の菊が出来
貧乏を天まであざける雨がもり
加賀市　細呂木魯木

日本語の便利さどうにでも云いのがれ
踊りの輪酔ったのがじゃまな娘達
大阪市　森本良夫

入院

髭それば斗病の顔笑ってる
病室へ生魂さんの遠花火
大阪市　室谷鉄舟

そろそろと本性現わす旅の宿
気嫌よい今日の蓑虫糸長し
笠岡市　木山遠二

似て居ない父に足音だけが似る
コスモスがゆれて居るのに風が無し
奈良市　村上春巳

8ミリへ子鹿不思議な顔で来る
鹿の角切り
最後まで貫禄見せる角切り場
大阪市　宮尾あいき

秋芳洞見学

洞内の起伏へ電光淡く映え
死の国を秋芳洞に見る心地
大阪市　宮地双楽

穂のたれた田圃に父の腰ものび
振り出しに戻どる覚悟で都落ち
笠岡市　木山要次

霊魂を信じて新しい土を盛り
えらい事云うてしもうた俺の負け
富田林市　岩田美代

うろうろと値上の秋を歩くだけ
美術の秋分らぬまんまうなずいた
福井市　大山雅城

田の畦にやっと見つけた雨蛙
田舎者なりゃこそできる縄を綯う
大阪市　天正千梢

父ちゃんの寄生虫よと贅重ね
酒のまぬ夫せめてまつだけ買うときめ
福岡県　太田湖平

旱魃へ銀の星より雨ほしや
谷底が急に世に出る照り続き
泉佐野市　大工睦夫

アカシヤの盛衰蓑虫を慌てさせ

定期券出す癖守衛を笑わせる
八代市　満田銀風

金を追い金に追われて五十年
セールスに心の底を見られたり
岸和田市　葛城伊三郎

やりくりがついたとたんに腹がへり
やりくりで買うた車を貸せと云う
八代市　永松道雄

世話と言う世話引受けるおばァちゃま
雨連れて台風さんでも来て欲しい
岸和田市　上林加仙

達筆に誤字が見つかる走り書
薬効の稲豊作に値が上り
松江市　柳楽鶴丸

数学に強い銀行マンのハシゴ酒
ミカン山へ十億円の雨が降る
美祢市　安平次弘道

若い役踊れば師匠若くなり
太陽の炎にいどむ金環蝕
笠岡市　出原真奇

福山城「浮世絵展」（一句）
浮世絵を見ている美人に又みとれ

畳替えほめれば妻が顔を見る
小松市　馬場魚山

砲火交えて両方悪くないと言い
焼けなんで好かった見舞い酒で酔い
新居浜市　近藤凡生

ハンマは響く愛か呪詛か憎しみか
宿命言うなかれ日曜青い空
和泉市　西岡洛酔

はち切れる若さ丸っちょいミニの膝
高架下ここにもテレビある暮し
加賀市　木村一路

入院雑感
静注へ今日は機嫌の悪い針
湯の街の病舎眠れぬ三味を聴き
竹原市　杉原愛鳩

行きずりのえにしまつわりつく小犬
満腹の蛇が見逃すやせ蛙
京都府　清水谷句楽坊

鼻欠けて居ても笑顔で石地蔵
金紙の蓮華で仏満足し
京都市　都倉求女

和倉
のびのびと躰のばして温泉を賞でる

能登金剛義経母かくし
激浪と断崖かくも太古から　奈良県　西辻竹青

ついてゆくだけが精々と本音はく
時期が来たらきたらと居据る気　泉大津市　高津徹也

タイル張り屋のおっさんがすべった
京しぐれ橋のたもとはまだ遠く　松江市　岡崎祥月

肝心なとこで困っている無口
割切っている生活にある甘味

十一月号分

それぞれの花のいのちに生きる幸
定年制反対心で叫ぶ俺　菊沢小松園

★

だしがらになるまで男働かされ
ラッシュアワー怪我して死ねという如し
まだ生きるつもりの顔を敬老日
眠てしまえば三畳一間も広いとこ
咲けば散り散っては腐る世に気附き　清水白柳

じゅうたんのある階段に威圧され
合宿の灰皿鮭の缶ばかり
意地つぱり動かす駒の無い癖に
スガイ化学K・K四十周年を祝う
紀の川の流れ不惑の社を見上げ

後から見るべきものか女
おじいちゃんに成り切る柿をむいてやり
待つ人もない踏切もかねは鳴り
戦禍なお海の彼方の墓洗う
秋の雨よしマダムも酔うてくれ　川村好郎

道時寺にて
尼僧の一言二言金鈴のよう
船酔いへ港の見えたことを云い
宿の朝蒸発組が喧ましい
あがり飲む屋台の上の一時雨
PTA大ボス中ボス小ボスあり　西尾栞

十二月医者も退院させたがり
冷暖房完備の冷が目に寒し
アパートの隣りもお風邪らしくしゃみ
塞翁が馬を定年まで信じ
気が付けば妻も半生紀を生きし　北川春巣

何となく妻にお礼を言いたい日
どれ着て行こか老妻も女なる
金婚へもう七年をいとおしみ
せめてネクタイ流行を追ってみる
よんどころない用だけが廻って来　若本多久志

川傍柳初篇研究（五十四）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須唖三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

455　**桑の門出ると御医者が壱人出来　亀遊**

藤井＝桑の門は総門と同じ。根津の入口の門で寛天見聞記に「惣門より内、両側娼家連続」とある。宮永町と八重垣町の間を流れる藍染川に架かる手取橋の袂に立てられた朱塗りの門だ。根津は大工の遊客が多く川柳では大工専門になっているが、ここでは土地がら、医者に化けた上野あたりの坊主だろう。

一夕の歓を尽して総門を出る時お医者というからには、一本差してすました大医面を思い出す。昔は坊主は遊廓に登楼する事は禁じられていたから、苦肉の策で入る時と出る時は医者に変装した。

高須＝桑門（くわのかど）には、僧・出家・世捨て人の意がある。総門は外構えの大門、総構えの正門だから「山門を出ると医者になる」という句で、僧侶の遊所通い芝から品川へ、上野から根津へ、どっちでもよいのではないか？

清＝桑の門は高須説通り寺の門、また医者に化けた僧侶の行き先は、必ずしも岡場所とは限らない。「化けて来た医者は上野か浅草か」（四六・26）その他たくさん吉原行きの句が詠まれている。

丸＝賛。ただし「桑の門」は出家・僧侶の意味だから、出家が出ると医者が一人できるということになり、寺を出た僧がたちまち医者の姿に早変わりするとなる。［門］いったので「出る」といったいささか苦しい措辞。御医者の「御」に皮肉を感じる。

岡田＝同。

456　**放馬さかさに抱て乳母はにげ　眠狐**

藤井＝これも放馬。前回の「ばあさまを四五間かつぐ放れ馬」と同工異曲の句。赤坊を逆さに抱いて逃げたのだから、余程あわてたにちがいない。暴走のダンプカーやトラックに似て、今でも新聞紙上に絶えないのは同じだ。

放れ馬理不尽に嫁かけ上り　一六・1
放れ馬嫁はこし屋へかけ上り　傍一・24
放れ馬大手をひろげては逃げ　九・24
放れ馬とらまへて来てしやべるなり　二〇・33

清＝賛。ただし「さかさに抱いて」は、子供の頭を下に足を上にしてか、それとも背中に抱いて、つまり子供を前向きに後から抱いてか、あわてているのだから頭を下に抱いた方が妥当のように考えられるが。

丸＝賛。頭を下にしてだろう。誇張表現

岡田＝誇張でも、ありそうな句。

六月五日開

457　**扶桑を向ひて念ずると蜘が出る　桝水**

藤井＝吉備真備が唐に在った時、唐人宝誌和尚は耶馬台詩を読ませられて解し得ず眼を閉じ住吉大明神・長谷観世音を念ずると、何処からともなく一匹の蜘蛛が詩の上

に下りて糸をひいたので、これに従って読み得た、唐人は凡人に非ずと驚いたとの故事。扶桑は日本のこと。

くもの様に大臣こじつける　二〇・16
くもの振舞を他人はしらぬ也　一六・21
くもの歩くのはしらずたまげる　一七・31

川端＝賛。

唐人の目には蜘なく読むと見へ　三四・11
吉備よくもすら〳〵〳〵と読終り　三五・2
吉備よくも蜘は日本の味方也　三五・27

高須＝賛。「扶桑を向いて念ず」は文句取りと思う。

前田＝賛。クイズ的で面白くない。

丸＝賛。

岡田＝同。高須兄が文句取かと申されたが、定まった文句からの文句取ではなく、神仏を念ずると「あやしや一むらの紫雲舞ひ降るると見るや、雲中より声あり……」云々などとよく物語に出てくるのを使用しただけの句。

458　**二条通りを真直にしよつて逃　泉　河**

藤井＝在原業平は阿保親王の第五王子。行平の異母弟で、貞観年中左近五中将になり在五中将と称せられ、容姿秀麗で和歌をよくし「伊勢物語」は彼の所行をものしたと伝えられている。兄弟そろって日本の好色史上のドンファンで、二条の后とのかけ落ち事件は有名。芥川をやわやわと負ぶって渡ったが、後から堀河大臣大郎国経大納言に追われ遂に取り返された。

出は出たが二条の后立ちのまま　二四・12
どこへ行く気だか二条をにげにげ　二六・13

川柳子はやはりかけ落ちの后に十二一重を着せ、業平には笏を持たせなければ承知しないから、足弱で重装備の后をつれてうろうろしては追手につかまる。ままよと業平は后を背負って二条通りをまっしぐらにダッシュした。二条通りは二条の后との縁語芥川どっちも逃げるなりでなし　一〇・4
つれて逃げなよと二条の后いひ　一九・14
足弱を豆な男がつれてにげ　九・6

高須＝二条の后は中納言藤原長良の娘、のち清和帝の后、業平との情事は有名。

塀の破れから来なよと后いゝ　末三・10
見かけより二条の后気が太し　傍二・11
あてもなく二条通りをおぶい出し　二八・10
歩いてはいやと二条の后いゝ　天三智2
やわ〳〵と重みのかゝる芥川　初34
いしきを撫でちやあいやよと芥川　三二・32
二ア人に足跡ひとり芥川　二五・1
芥川神代も聞かぬ不埒なり　拾四・22

丸・岡田＝賛。

459　**人にいやるなよと禿に乳をのませ　胤　弓**

藤井＝女郎だとて妊娠することがある。止むを得ず「とや」につき、産んだ子は里子にやり、肥立ち早々勤めの身は客をとらねばならぬ。夜毎に張る乳に禿を呼んでそっと人にいやるなと口止めして吸ってもらっている。吸う禿の口に乳もさぞ苦かろうと、吸われる女郎の胸中もさぞつらかろう一篇の女郎哀史、禿を配したために長編の小説よりも人の心をうつものがある。佳句

高須＝柳雨翁は「我が子の禿か」といい三面子先生は「そんなことを言ってはいけない」と叱ってはいるが礎稿で文句なし。ソ連映画で、汽車の中で夫が苦しがる（乳が張って）妻の乳を呑んでやる場面があったが、いやらしくなくいい情景であった。佳句と思う。

丸＝賛。

岡田＝モーパッサンの短篇に、汽車の中で乳を呑んでやる話あり。高須氏の見られた映画はその作を使用したものです。

「川柳雑誌」バックナンバー。〃**川傍柳初篇研究**〃掲載。
「**川柳塔**」バックナンバー。第二号から近刊まで。（創刊号は絶版）
須崎豆秋句集〃**ふるさと**〃掲載の「川柳塔」
路郎著「**新川柳鑑賞**」摩天郎著「**堺の人々**」薫風著「**れもん**」ご愛読を乞う。

秀句鑑賞

…前月号から…

後藤梅志

捨猫とうなだれがちの向日葵と　（薫風）

この句を取り上げる気になったのは、

捨猫のまわり秋の陽じつとする

という、旧作を思い出したからだ。戦後の焼跡の叢の中に、生れたばかりの猫の子が三匹、うごめいているのを見て、立ち去り難く感じた過去の思い出が、同じ想いを誘った。

取り上げた句には、きびしさはない。その代り、この作者特有のやわらかい線が、句を支えている。「うなだれがち」というのは、陽も西に傾いた向日葵を指すもので、捨猫に対するものでないことは勿論である。

捨猫には、掌のうらをかえすような、人間の非情さを感じるものである。

使うほど良くなる脳の話し聴く　（形水）

淡々として、だいじな話を聴かされたような句である。

天界のどこを探っても、人間の脳の働きほど絶大なものはあるまい。但し使いようでである。みんな、中途半端な使い方をして、疲れ果ててしまう。十人が十人。百人が百人。欲望のとりことなったり、節度を缺いたりして、機能をそこねてしまうのである。

脳にも、こやしをやらねばいけない「恩」とか「感謝」というのは、みな天与の肥料である。こんな見易い道理をわすれる人が、なんと多いことか。

手も足もバラバラになれ蝿叩き　（いわを）

蝿取りの名人というものは、すこしも動作を変えないで、蝿が人間をナメて来たところをかくし持った蝿叩きでかるくポンと打つ。蝿は目を廻わしたのだから、ぐずぐずすれば逃げる。そこを紙でひねりつぶす。とこうした寸法である。

この作者は、元来蝿が大きらいと見える。蝿叩きをもって、目を据えているのである。しかも三匹に一匹ぐらいしか、獲れないであろう。しかし、この句は痛快な句だ。蝿一匹でも、嫌いなものは嫌いだという正直な感情がきたんなく見えて、好感がもてる。

ジャイアンツ負けたぐらいで酒をのみ　（満秋）

ジャイアンツびいきにいわすと、このチームには外人が一人もいないからという。その外に、選手の異動がすくなく、打力が安定していることを挙げる。優勝は当然だともいう。いかさま、もっともである。

しかしながら、どのチームにもツブよりの選手がおりチーム打力もさ程の甲乙がない。それでいて優勝をさらわれる。その原因はどこにあるのか。これはある意味で球界のナゾであるが。想うに、その要素は、熱心なファンにあるのではなかろうか。

この作者も、その情熱家の一人であろう。

意地悪か年のせいだか早く起き　（正朗）

この句には、なにか盲人特有の意気込みのようなものが感じられる。

われわれが朝起きの習慣をつくるためには目が覚めたら、すぐ起きることだと聞く。なにも考えずにである。これがなかなか出来ない。

盲人の生活のなかで、朝は一番重要であろう。意志を方向づけるに、大切な朝である。意地悪でもない。年のせいでもない。朝の空気は、盲目の人の生活を一日ずつ延ばして行く、清新な光りが待っているのである。

秋白く病む娘の指のなお白く　（不朽）

この句を、作者の意中の人であるように見

るのは、思い過ごしであろう。しかし、秋はものを想いがちである。

「秋白く」としばし目を外らしたところにこの句のいのちがあり。作者を非情の人となしえない、何物かがありそうである。

句は、単調に「病む娘の指」に焦点をあつめているが、秋白くと相まってすっきりしている。一本気な作者の神経が、病む娘の身辺にはりついているような感じだ。

駅の雨まさかと思う妻もいる　（笑　風）

うまい句である。駅の雨というのは、俄かに降り出した雨のことであろう。省略もきいている。

こんなに急に降り出したのでは、かえりの時間もハッキリしていないのに、来ている筈はないと思いながらも、人の肩ごしに見れば妻が傘をもって立っていた。

ありふれた光景であっても、いい感じだ。「まさかと思う」が、非常によく利いているのである。

ついかつとなつたを悔いる磯づたい　（菁　居）

「磯づたい」が、この句を抒情的なものにしている。

この句は、句会吟ともとれるし、創作ともとれるが、個性はなくとも、句に親しみがもてる。

磯づたいというのは、岩から岩へ、足許をぬらしながらあるく。ただ一つのことを考えてあるくのには、ここよりほかはあるまい。ただ、創作であるならば、何かしっかりしたものを一つ、つかんで欲しい気もする。

楽しさは夫の留守に髪を変え　（美　穂）

着想がいい。

夫のかえりをまつ妻の気持ちは、あれもしよう、これもしておこうかと、さまざまだが髪の形をかえる妻の思案は、賢明である。

初心者らしいかんじがするが、句はなかなかしっかりしている。びっくりさせてみようという、妻の期待が手にとるように分かる。

こんな、妻の気持ちというものは、昔も、いまも、かわりがない。

戦友というのを子供不思議がり　（雀踊子）

「父ちゃんあの人誰れやねん」
「ウン戦友や、一つ鍋の物食べたんや」
「よう酒のむナア」
「うん飲みよるで、あれ酒が好きなんや」
「フーン」

子供には、まだ合点がゆかぬらしい。それもその筈、子供は戦争というものを知らないのである。戦争というものも、もう遠い過去であることが分かる。

ああ戦友!!なんというなつかしい響きをもつものか。

線路工夫昼寝の癖も板につき　（黒天子）

線路工夫というものは、鶴はしを握って、何やらわめきながら、おんなじことを繰し返しているようで、なかなか油断の出来ぬ仕事である。頭もなかなかよく使い。重たいレールを動かすのも、手に入っている。昼寝をするにも、枕木の上へ上手に寝る。

その習慣があるのか、非番で、たたみの上へ寝るにも、ちんまりと、場所をとらないように寝る。という面白い句だ。

句の見つけどころが、老練である。

近所気にしない太鼓とお題目　（和　宏）

これは、日蓮宗の一派であろう。

この人達は、グループがあり、毎夜のようにどこかで集会をしては、太鼓とお題目を上げる。ご近所ははなはだしく迷惑をするのだが、一向気にしない。ばかりでなく、これ見よがしである。

だから近所衆も、日蓮宗となると、一目おく。見ようによっては、気がふれているとしか思えないのである。

この作者も、これでいいのかと不満げだ。

会えばすぐ喧嘩の兄を待ちこがれ　（瑞　枝）

室生犀星に「あにいもうと」という名作があり、それを地で行くような句である。

犀星は、人道主義的の詩人で、特異な小説家である。「あにいもうと」では、酌婦をしている妹を、石工の兄が迎えるとたんに喧嘩がおきる。摑み合いである。人情の機微にふれ、名作の名にふさわしいが、この句の場合もなんとなく、それに近いかと思わせる。

こういう句には、上手、下手はないが、肉親の愛は、外見と全くちがうものらしい。

今月の同人特集は「語味の市」にしました。というと聞えがよいが、白状すると締め切りまでにオモワクの原稿が寄らなかった。そこで十二月号らしくイロンナものを集めてみたのです。―どこかの呉服屋サンの呉味の市をマネたのではございません。（編集部）

★

ことしのボーナスプランをお聞かせください。

『その一』

津秋六花

一国一城の主です鶏を飼い　六花

在鮮時代から賞与を出す立場になった事はあるが生れて五十七年一度も給料なるものを貰う側になった事はない。従ってボーナスを貰った事がなく一度夢にでも良いからたんまりボーナスをお頂戴して見たいな等と歳の瀬ともなれば思う事もある。

二十一年春引き揚げた時も製図器一組手に入れば建築屋にでも就職出来、一応生活も安定したであろうが、又二三朝鮮時代の職歴を知った土建屋から貰いもかかった事もあったが、小さくとも貧乏やり繰りに苦しんでも、一国一城の主の味が頭から足の先までしみ込んだ身に、そんな誘いに乗る気にもならず、鶏でも飼うかと、とうとう二十年、そこでヒョコも飛ぶように売れ卵価も天井知らずに値上りしてドカンとたんまり儲けたら、と云う夢でも見ながらご依頼のボーナスプランを計画して見る事にする。

朝起きの習慣つける鶏を飼い　侃流洞

ヒョコを育てたり卵を産ましたりしておマンマを食う専業養鶏は、朝起きの目覚し時計がわりに庭先で飼うのと違い、家族ぐるみの二十四時間勤務、それに男と生れたみょうが か私は色々な雑用で家を空にする事が多い、そんな時の妻は全く手が八ツあっても足らぬらしい、と云うわけで口ぐせのように一生一度でも良いからたとえ一泊二日の旅行でもして見たいと、いや全く私にとっては胸に五寸釘のような愚痴もたびたび。

初孫を抱けば姑の顔でなし　六花

目と鼻の先の宇部空港から大阪へは一時間の一と飛び、有りっだけの金を持たしてゆっくり大阪の息子の処へ孫の顔でも見に行きなさいと、寝言にでも云ったら、引き揚げ以来の苦労で最近めっきり白髪の増えた妻も踊り上って嬉ぶ事であろう。これが夢でなく私の心の隅で常にうずいている希望でもある。

『その二』

中川滋雀

「あんたボーナス何日頃出るのん。」

「そうやなあ、今年は不景気やさかいチョット遅れるのんと違うやろか」

これに似た会話がお勤めのご家庭ならきっと交わされることと思います。

私も一応はボーナスを戴くキリの方の小ボケな会社勤め、そのくせ時代の尖端を行く？広告関係でありながらさぞやとご想像されるボーナスを拝んだ覚えがありません。

ボーナスを両手に受けるに軽すぎる　弘道

いくら軽いボーナスとはいえ、そこはかとなき夢もプランもありますが、ボーナスの噂が流れる頃から世間様のご家庭とは少しばかり変ってきます。

私の家は親ゆずりのしがない小商売、妻が留守を家事と接客でよく働いて呉れてはいてもご多聞にもれず苦しい生活に、いくら「食事つき永久就職」と思うてはいても不満も出てこちらの薄給を淋しがらせて呉れます。

しかし小商売とはいえ年末は仕入れ資本の少しでも余分に欲しい折、丁度ボーナス時とかちあって真先に狙われ封も切らないまま右から左へそっくり仕入れへ組み入れられて、「少ないと思うてたのにこれだけあれば、あれとこれが買い足せるわ」

妻のたくましい商魂の算盤に弾かれては私も立ち入る隙もありません。

十二月手品のように金が消え　東　岸

こんな訳でボーナスプランなどおよそ立てる暇もなく過ぎて来ましたが、子供達も観念してくれあれが欲しいこれ買えとは言いそびれているのが痛いほど判ります。

「お父チャンそんな太いズボンはかんといて欲しいわ、うちが格好悪うてかなわんが」「ボーナスでイカスのをいっちょはりこみいなあ」なんて暗に自分達のも仄めかしてるのが精一ぱいなのでしょう。

ボーナスで父の腕前疑うな　路　郎

かくて衰れ私のボーナスはいささかの商品と化けお客様のボーナスを狙うネタとなって年を越すプランを笑いながら店先に飾られます。

ボーナスが素通りをした注連飾　和三郎

ボーナスに子供の夢をこわすまい　青丹子

子の願い叶えてやれぬ賞与抱き　滋　雀

ことしの総決算に何かひと言おもらしください。

★

『その一』

戸田古方

悴の悴がビリケンさんのような頭をして生まれてきた。生老病死を四苦というが、生まれるということもなかなか苦しいものらしい。その苦しみは誰もが味わったはずなのに誰もおぼえていない。しかし、その苦しみを通ってこそ人間の生きるよろこびが味わえるのではなかろうかと思う。私は生まれたばかりの赤ん坊のへんに歪んだ頭を見ていてふとそんなことを考えた。

産みの苦しみというのは母親だけのものではないらしい。それにしても産みの苦しみは女の業であろうが、母としての喜び、誇り、尊敬と光栄はそこから生まれる。

その点、父親である男は衰れである。「おかあさん」というときと「おとうさん」いうときとニュアンスは大分ちがう。

母親は勿休ないがだましよい　古川柳

逢うてきたのに母寒かろう寒かろう　多喜女

というのを父親におきかえては通用しない。戦後はことに父親の相場はドカ落ちした。父親疎外というのはひどすぎるとしても、地震雷、火事、親父の親父の場所へ台風でももってこないと格好がつかなくなってしまっていることも事実である。サラリーマンの父親は全くのところ餌運びをしているにすぎないといわれる所以である。しかし、すむとすぐ咬み殺されてしまうというカマキリや雄蜂のことを思えば人間の父親族は大いに喜ばねばなるまい。

人間は教養に長い期間がいる。母ひとりではどうにも力不足である。父は照り、母は慈愛の雨となって一粒の種に花を咲かせるのであるが、格好だけいかめしく一切を牝にまかせきるライオンのパパに似てきているのが人間の父親らしい。教育ママはあっても、教育パパというのはあまりきかない。

文化とは衣食住から出発しなければ理解できない。衣食住から経済へ、社会へ、そして真喜美の花を咲かせたとき、聖につながってくる。それを綜合的にみたとき文化ということばがはじめて生まれると私は見ている。その文化を構成する上部組織と下部組織ということばがある。精子も卵子も下部組織の方の

ものだろうが、精子・卵子の結合にはじまって細胞の分裂・増殖を繰り返して、生物が生まれる。その営みを直接受け持つのは女体であり、この時から女は母に昇格する。女は弱し、されど母は強しである。

子を抱けば女の腕の太くみえ　古方

江戸時代まで「ハラは借物」ということばがあった。ことばのあったということは思想があったことになる。種は男のものだから大切にされるが畑である女の血統はあまり頓着しなかったようだ。家康が今川の娘を妻にして手を焼いてから将軍の子を産んだ側室は案外市井の女が多い。全く気にしなかったわけでもなかろうが、犬公方とおだて上げたような非常識な生母が時としてあらわれたりする

今どき「ハラは借物」なんていうことを考える人もいないだろう。父母の因子が平等にはたらいて子に伝わる。子は父にも母にも似るということは子供だって知っている。

そろそろ話を上部組織にもっていこう。胎教ということがある。平易にいうと精神教育のことだ。胎教とは胎内における胎児への精神教育ということになるらしい。生まれてからでも孟母三遷の教ということもあるし、偉人を生むものはその母であるともいう。母親の精神的影響の大きいこともいわれてはいるが、私の経験した限りでは胎教は父親の方に軍配が上がるようである。私の母の姉、私の伯母と母とは生まれる頃の祖父の生活にどうも左右されていたように思える。伯母が生まれた時祖父は主人の店から別家独立を許され立派な店を構えて威気揚々としていた。伯母は一白の生まれだそうだが、陽気で、明かるい、さっぱりした気性である。ところが四年ほどあとで生まれた私の母は祖父が調子に乗りすぎて失敗して、すこんでいたときの子だそうだ。どこか、みみっちいところが死ぬまで抜けなかった。只失意の祖父が信仰に身を入れていたので伯母より早く信仰に近づいたといわれていた。又私の三人の子供も、長女は私が浮世の風をあまり知らない時に生まれたので、どこかのんびりしている。長男は私が商売人時代に生まれたので、商売人になった。自動車販売会社に入って、役職について相当にやっている。末っ子の次男は教師の子だ。だが、私は教師になってやっと伸び伸び羽根をのばしたので自分のすきなことには熱中するこり性である。勿論、母や伯母も祖母の影響を受けていなかったとはいえないし、私の三人の子供も私の妻の影響をうけていよう。しかし、夫の機嫌、不機嫌を敏感に感じとるのが妻であり、それが家庭のムードを作ることになる。母の影響は見えない所にうずくまっているようだ。

直原玉青著
「新しい南画と俳画の描き方」
創元社出版
価二千円
本社でも取次ぎいたします。

祖先から商売人であったわたしの家。商売人としてバリバリやっている最中の悴の悴として生まれてきたこの魂の未来像を考えているうちにいつのまにやらこんなものを書いてしまった。

★

『その二』

野村味平

ことしの川柳塔十大ニュースはなんといっても〝松江梅里追悼号〟が出たことである。

この夏、「松江梅里追悼句会」と封書のある〝千代かけてかわらぬ松の結び文〟と染め抜きの手拭いが届けられたので、私は瞬間錯覚をした。梅里さんが路郎師の三回忌に際して手拭いを配られたのだと思ったが、それに

しても符に落ちないままで過ぎて、やがて本誌八月号が届いてようやく、ことの真相がわかった。梅里さんが逝去された。このときの驚きは今なおありありと胸に迫るのである。

川雑時代に何号だったかの記念句会に心斉橋の中華料理店の階上で梅里さんに初対面をした。あの日の席上で最初に声を親しくかけてくださったのが如才ない梅里さんだった。若き銀行員として在職当時、大聖寺出身の俳人故太田竹露氏に五七五の手ほどきを受けこの道にはいったのがはじめとなつかしんでおられた。

路郎師は蜆が好きだと云われるから、梅里さんのお商売柄、毎日手にはいるだろうから五合宛届けてあげなさいと云って帰ったこと路郎師ご逝去のとき梅里さんに書簡を送り、毎日蜆を届けられましたかと問い合わせたところ、長い長いお返事をいただいたが、蜆のことについては一字も触れてなかったことが思い出され、今からおもえば「これには深い事情があって」のみ書いてあったので、あの節あんなに詰責めいたことを申しあげなければよかったと今では悔んでいる。

ちょっと話が暗くなったので明かるいとこをもう一つ。

茶の間の視聴者が腹から笑えるのはやっぱり漫才である。〝不二田一三夫作〟などとあるときは心おどりを覚える私である。テンポの早い漫才の脚本を書く作家のご苦労がよくわかるような気がする。せっかくのご健筆を祈る。

★

『その三』

川岡霊眼子

—大鵬関からマスの贈り物届く—という見出しで新聞に載った。

諫早市天満町の千里眼師、川岡光雄さんのところに、このほど大相撲の横綱大鵬から、「大鵬・芳子」の記名焼き印の入った一合マス（〇・一八リットル入り）が結婚記念品として届いた。

これは、ことしの五月三日、東京帝国ホテルで行なわれた小国芳子さん（一九）と大鵬との結婚式に川岡さんが遠方のため招けなかったので、日ごろのお礼にと二所ノ関親方の実兄で佐賀県に住んでる北村境さんを通じて贈られてきたもの。

川岡さんの話では、現役時代、佐賀ノ花のシコ名で活躍した二所ノ関親方とは、相撲界に入る前からの知り合いで、川岡さんのところによく相談などにきていたといわれ、そんなつながりから、こんどの九州場所後（九州場所は十一月十二日フタあけ）の地方巡業のさいには、大鵬といっしょに川岡さん方に立ち寄ることになっているという。

川岡さんは、このマスは、ますます盛りあがるという縁起のよい祝い物だ…と大鵬の真心に感激、諫早川柳文化会の会長でもあるので、さっそく、

大鵬をたやすく負かす嫁が出来

との川柳を短冊にしたためて大鵬に贈った。（諫早）

右の記事にもあるように私と勝巳さん（二所ノ関）とは彼が相撲界にはいらない以前左官の先取りとしてはたらいた頃からの知り合いである。

★

『その四』

吉田水車

俳句をよくするある友人と川柳問答をしたのが、ざっと次のようなものとなった。

「川柳をどう思うかネ」

「川柳も詩として一つのジャンルであることに間違いない」
「それならどんな句がよいと思う？」
「自分は川柳はただ漠然と知っているだけでさて、よい句を挙げよと言われても困る」
「それなら、これはどうか」と私の句

人が来れば言い訳ばかりする暮らし

を見せる、
「おもしろいネ」
「どこがどうおもしろいのか」
「おもしろいものはおもしろいと受とればよいので、人がただ有難いの一念で神仏に向えば妄想の入る余地がなかろうと言うものだ」
と禅坊主のようなことを言う、そして
「一たい、ひとの作品に批評を加えることに疑問をもつ、勿論批評は各自の自由で何と考えようと異論の限りではないが、それは各自に収めて置くべきで、それぞれの機関に発表するのはどうかと思う、多くの場合優れた作品に対して、それが人の心を打つ故に注目もされ様々な批評に会うのであろうが、批評を受ける本人（作者）にしてみれば、まるで見当違いであったり余計な詮策をされるのは耐えがたいことであろう。芸術性の豊かであればあるほど人々の心を打つ、打たれれば又その真想にふれてみたいのが詩を愛するものの常である、批評はいかんと言ったけれども、芸術性の探究の範囲でなら批評大いに結構、自分も左様したい」

さて右の問答で私はもう少し川柳についてただしてみたかったのだが、おもしろいものは素直におもしろいと感じるだけでよいとする意見に、少々独善のきらいはあるが、これも一つの見方だと思ったのである。

★

『その五』

不二田一三夫

ここへぼくが顔を出すのはオカシイが、あと四十行あれば印刷所へまわせるのだ。どなたかに電話で頼めばいいのだが、これでは仕事にならないからまた書くことにした。

どこサンも同じらしく、誤字やあて字の多いのは柳誌の宿命らしいが、校正していると句意のわからないのによくぶっつかる。こんなのがあった。

テーブルをたたいて難行しているというのだが、どうにも句意がわからない。しかし選者が入選させたのだから選者には句意がわかっているのである。こうなると校正はストップ（この時間がもったいない）

校正中の疲労したアタマから、やっと句意がつかめた。難行を正確に〃なんぎょう〃と読まずに〃なんこう〃と読めば、会議らしいものがテーブルをたたいて〃難航〃している句になるのである。正確に書いていただいても校正のミスが毎号どっかのページにころがっている。文字は楷書で正確にお書きねがいたい。

同人吟の〃川柳塔〃や〃近作柳樽〃の同句数の順位はどうして決めるのか、という問いあわせがある。選者から回わってきたのをそのまま組む場合もあり、とじこんだまま編集部へくるときもある。

まず句数順に分類する。トップクラスの五句組みが、かりに十枚あれば、なるべくなら新しい人に巻頭をもっていきたいのは人情であろう。しかし五句とも六十点のより、八十点、九十点というのがあればベテランが再三巻頭をとってもおかしくないとおもう。

五句入選で八十点とか九十点とかいうのはたとえば十句のうち九句まで第一予選を通過し（この場合赤インクでチェックされている）最終選でそのうちの五句が入選したもの、はじめから五句よりチェックされていないのがある。だいたいこの方式でならべているのだが、同数なら上下の差など問題ではないと、ぼく自身はそう思っている。

漫才・ニワカ・川柳

光武　弦太朗

いささか三題話めくが漫才とニワカと川柳にはいろいろの共通点がある。

第一に、三者共に庶民の中から庶民自らの手で娯楽芸能として創られ興隆してきたということである。第二に、作者が特定の専門家でなく庶民自身であるということ。但し今日ではいささか事情がちがってきているけれども。第三に、三者共に時代の風俗や時の為政者に対する諷刺的要素を含んでいるということ。第四に、滑稽（おかしみ）を目的としているということ。もちろん川柳はこれのみではないこと、もちろんである。第五に、庶民生活の哀歓をリアルに取り上げ身近かな材料をカリカチュアライズして万民の共感を得ているということである。

本誌幹事の不二田一三夫氏は、漫才の隠れた名シナリオライターとして活躍していられるが、あるとき、秋田実師匠から「漫才のいい本を書くつもりなら、川柳は一応忘れてしまわにゃいかん」と云われたそうである。

これには成程一理あると思う。

川柳は百字の内容を十七字に凝縮する芸である。これに反して、漫才のボケとツッコミのやりとりは、十字の内容をいろいろに変化させ発展させ脱線させ食いちがわせて、そこにオカシミを創り出さねばならない。十字の内容とは言ったがもちろんこれはコトバのアヤで、作者はまず非凡な着想に苦心する。つぎにコトバのヤリトリとその内容に苦心する。眼の着け所、思考の飛躍、常識のひっくり返し等々。しかもそれは私たち庶民の日常に密接したものでなくてはならない。ゼニを払って聴く客を腹の底から笑わせるということは、実にむつかしいことである。

ちなみに私は、東京漫才よりも関西漫才の方が好きだ。東京漫才は余りに知的でコミックになりすぎ頭だけの笑いに終っている。時には演者がエラくなりすぎて、こちらはまるで叱られているような気のするものもある。あるいはチッともおかしくもない拙い芸をみせて観客に拍手を強要するに至っては言語道断だ。すこしばかりテレビの出演が多くなったからとて思い上って貰っては困る。芸人はあくまで芸で勝負すべきだ。

その点関西の漫才は、その伝統の古さに加えて秋田実師匠一派の名作家をひかえているせいか、まず、漫才師が芸人根性に徹していて勉強を怠らず、芸と云い面白さといい観客へのサービスと云い、さらに庶民の暮しへの身近さといい抜群だ。この上とも御精進を祈りたい。

さてニワカもまた大衆の暮しの間から生まれた。私は大阪の方はハッキリ知らないが、博多ニワカは年に一度の祭りの俄舞台で、町家の旦那連がニワカ面に顔をかくし、日頃公然とは口にできなかったお上への批判や諷刺の要望を、或いは洒落のめした機智に托し、或いは滑稽のオブラートに包んだトボケた比喩に托して、面白おかしく博多弁で喋りまくり、観衆の溜飲を下げたのである。このニワカの創作精神もまた漫才・川柳に共通している。しかし、この三つの民衆芸術で、ただ一つ異る点は、漫才・ニワカは舞台の上の一回ぎりの上演で後は忘れ去られるということだ。

これに反して川柳は一度活字となって世に発表されるならば、永久に残り得る可能性がある。私たちは、生涯に一句でもいい、万人の心に食い入り大衆の胸に訴え、人びとが忘れようとしても忘れられない、そういう川柳を創るように努力してゆきたいものだ。

水見舞水一升のありがたさ　　葭乃

消費者のどっち向いても痛められ

（医家・ふあうすと同人）

近作柳樽

川村好郎選

宿毛市　瀬田美知

日々疎とく水にうえてる墓地の菊
亡き人にそむかぬ暮しでつつがなし
忘れねば私がつらい日記綴じ
憶病が現状維持ときめ
ヘソクリの楽しみ知らぬ一人者

下関市　志賀木石

転勤に異議あり恋が進行中
電話切ってから悪態をつく内気
恐妻を看板にして仲がよし
威張ってるわけではないが腹が出た
競艇に軍艦マーチの阿呆らしさ

尼崎市　中溪慶彦

発車から紅い気焔の婦人会
相槌を打って上手に煽てられ
気がきいて間がぬけている妻で好き
横恋慕そんな悠長な恋はせず
飲み足らぬだけ割勘で誘われる

松原市　谷垣史好

信念といえば聞えはいい頑固
ロングスカートの方が不潔に見えるなり
あてのない散歩へ枯葉ついてくる
風船はいいなその日の風まかせ

熊本市　高野宵草

汗ポタリポタリ溶接棒が吸う
つばめにも名残りが惜しい秋の風
社交性なき吾に見る孤独
断わった後にわびしさだけ残り

新居浜市　村上水軍

お化粧をする程仕事はかどらず
寝床から寝床へ喋る旅の宿
好きなれば飲ませと医者は匙

島の朝潮満干の音で明け　東大阪市　坂東若芽

雲を突く夾竹桃よ夏は逝く
肉値上マトンを食べる智恵がつき
歩く孫這う孫我が家春が来た
雲のみが替わる浮世の窓に臥る　姫路市　前田芙巳代

死と対決裸の言葉見つからず
愛憎の愛かすかなり籍にふれ
視線意識して女武装する
偽りのベールはげば女はいいつのり　守口市　田中笑風

落城の石を地下鉄掘り返し
妻の座に甘さゆっくり崩れ去り
泉州の地価にゆっくり水車
たまさかの屈伸四十の骨が鳴り　米子市　林瑞枝

支払いの日から中古車ごね始め
からっ風失意の頬を横なぶり
人ひとり亡くして親類みな揃い
見舞われて今更ふて寝とも云えず　島根県　堀江芳子

腹立てて来たのをほぐすお茶の味
かあちゃんもう言うな今更見えたら職がない
失明と病弱の夫婦へ日が暮れる
白い杖やめて左右は子の温味　大阪市　江城功雄

身じろがぬ裸像へけものめく心
脊を向ける友に愛の渇きみる
共稼ぐ妻に女の爪がない
瞼閉ず療舎に古参の顔がない　加賀市　木村美穂

愛情を瞳の中で確かめる
男手の無い雨漏りに手をこまね
三十の化粧世間の眼に刺され
十年の歳月憎くく見る鏡　大阪市　小谷葉子

耐えることのみ多き女のしずけさ
小さい倖滝の音にはじかれて
湯煙りに愛生きてるをたしかめる
倖せな朝洗濯の渦しみじみ　出雲市　王紫

惚れ抜いていたに勝ち気が身を引かせ
長男に欲しいと思う娘の根性
マイホーム主義それだけの人でした

長崎県　光武　弦太朗

気の早いネオンに街の陽は高し
産声だけが真実の声
焼酎が言わす日頃の恨みごと

大阪市　和田　痴亭

才女ふと孤独の爪噛む夜がつづき
露天風呂老のヤセ脛透いて見え
書道展特選という読めぬ額

八幡浜市　別宮　すき

お名前をきくのわすれたお留守番
干魃
降りそうで降らない空へひとりごと
大声で小雨に踊っている農夫

岡山県　目賀　芳月

一億がひしめき合って人不足
人様の輪禍あほうにしてしまい
ライバルを追い越し白バイに押えられ

鳥取市　小林　由多香

方言も抜けて都会の水に馴れ
人形も入れて単身赴任の荷
故郷が話題寮の夜の憩い

八尾市　高杉　鬼遊

これでよいのか反省闇に冴え
暑かろう寒かろうの子が背き
意識して意識さすよう脚を組み

堺市　羽田　一扇

どこが違うもうチョンガーに見てくれず
口にせにゃ良かったやっぱり波が立ち
度々は折れてもおれず意地をはり

竹原市　岩本　文晴

もう一度念を押された不満な目
嘲笑へ秘めた闘志のうつむいて
待望の雨百姓濡れて佇ち

出雲市　森山　健太郎

近視眼ぐらいの遺伝は笑ろっとき
古本屋のおやじも合格祈ってくれ
二兎を追うどころか一兎さえ居らず

八尾市　高杉　千歩

ペンだこのとれた時分に職につき
荒々しく叱り優しくほうたいし
名人芸初老悠々と恋を舞い

鳥取県　川崎　秋女

気の遠くなるよな数よ手内職
禿かくす髪とは知らでほめられる
割り切れぬ左遷へ重い日をかさね

大田市　藤田　軒太楼

ぶちまけて夜道を帰る歩の軽さ
裸でもよいと仲人気を探り
うやむやに味方にさせる酒が出る

羽曳野市　河原林比呂路

いさかえばお国言葉でまくしたて
ケチ貯めて墓まで持って行くつもり
栄転も左遷も同じ駅発車

竜野市　森下峰子

確かめて見たい心がのぞかれず
進学のきびしさ辞書につく手垢
しょげる子にほめてやりたい語を探がす

呉市　槇田英詩

残り風呂汽笛が遠く遠く鳴る
おひらきに徳利ボーリングのよう倒れ
暇な時片付ける用また溜り

鳥取市　藤本恵子

父ちゃんの心を母ちゃんみな見ぬき
うちの服みなミニスカート欲しいでしょ
欲しいものチラッとうかぶ父の顔

鳥取市　藤本鎮也

面影の浮べようない文が来る
自動ドアーひやかし客にもサッと開き
知事さんがつけるから買う赤い羽根

鳥取市　藤本征也

全ストでキューピー誰にも愛される
ある日ふと心に寒風駈けぬける
大声で叱っている父眼が笑い

宇部市　櫛部いさ夢

水けんかする種もない池の底
すまないと水のある稲頭さげ
旱ばつによいお天気と云えぬ晴

新潟県　高野不二

テレビドラマ気安うビール飲む会社
わからん絵をわからんと云う勇気
四捨五入都合のいい時ばかり云う

仙台市　平野光道

今夜だけは善人になろうクリスマス
おこずかいあるかと老妻眼鏡越し
温泉の宿に夜明けてみれば北枕

大阪市　岩城太郎

泣きどころ教えてくれて紹介状
泣くにさえ裏表あり女
はっきりと云えばはっきり断られ

広島県　南条露声

うっとりとせぬうち女房に引っぱられ
我がものになってしまえばあじけなし

大声でどなって見ても一人切り
竹原市　森　井　菁　居

手をかけた栗より雑木の伸び具合
そっとして呉れる内輪が有難し
成行きに任せておけるのも齢か
島根県　堀　江　正　朗

衰えをあわてさすのも秋の風
耳だけで生きる世間のむずかしく
端座してももろく崩れた自省心
倉敷市　小　幡　里　風

ベトナムの位置押ピンが錆びている
がむしゃらにこの道独りゆく無口
喫煙室ここにも派閥あると見え
竹原市　時　広　一　路

茜雲静まる心動く色
踏み外すルールに若さという逃避
松葉杖ついた退院でも嬉し
京都府　菊　沢　破　天

手のひらへ苦労のあとを見せて逝き
たまったのを見つけたように子は狂い
あるだけのかさを見せたいなり上り
鳥取市　近　藤　秋　星

豊作の掛声ばかり派手過ぎて
馬鹿だなと自分を笑う恋でよし
お金では買えぬ情の嬉しくて
鳥取県　谷　無　閑

職業は親に知らせず化粧する
金づまり紅葉便りも腹がたち
ネックレスあなたも同じ安物か
大阪府　井　上　美　恵　子

扇風機首をすぼめて冬眠す
虚ろなる笑い気になる事があり
来年の運勢立読みして帰り
広島市　上　代　美　文

秋空へ祭り太鼓が吸い込まれ
掃除機でうたた寝の猫叩かれる
くせのある母の便りに誤字がふえ
河内長野市　森　本　黒　天　子

勧められ杖を持つ気になるも齢
七年先きの満期が待てず病みつづけ
手作りの菊に余生を見守られ
豊中市　河　本　雪　男

あどけない瞳にアイシャドー塗る時世
胎内の子供を諭すごとき妻
秋の夜の黙々硯の香にひたり
貝塚市　行　天　千　代

聞き上手思わぬご馳走よばれて来

猫でさえ器量良いのが先きに売れ
物価高ついでに血圧も上り
大阪市　西本保夫

公害のススを被って住む社宅
口論になった会議へお茶が来る
赤チンで済ます社内の診療所
尼崎市　平井露芳

まだ余地があるかラッシュの客が揺れ
阪急ブレーブス優勝
永かった陣痛やっと呱々の声
嘱託と云う名で定年息をつき
島根県　小砂白汀

正当な主張へ舌がもつれ出し
あくまでも此の道を行く向い風
良心を偽り端っこを歩く
下関市　志賀汀花

スカイライン渥美も知多も秋支度
磯笛は一人の旅を悲しませ
又一つこけしがふえて志摩の旅
名古屋市　花東千久良

ど膽抜いても女秘密の扉は開けず
活火山にならない理性を嫁は持ち
大阪市　塩浜一路

老後のこと考えまいと盃重ね
いらだちがダイヤルあちこち廻わしてる
長崎県　吉田季生

ややこしくなりレジスター筆算す
長崎干害
木犀の香り　ひでりが憎くなり
尼崎市　中谷利美

キブアンドテイクを逆に行く若さ
時差出勤管理職から早出させ
倉敷市　松下梁水

地下足袋で恥じない寡婦に明日があり
弔文を読む友情が叱ってる
鳥取市　北野天人

すばらしい夜景へフイルム残ってず
いさかいのあと黙って妻針運ぶ
茨木市　吉川悦子

寝返りを何度もうって明日のこと
又いつか云う時もあり聞かぬ振り
大東市　斎藤栄次郎

入智恵がまとまる話ぶちこわし
片腕同士のれん争う破目になり
米子市　八木千代

諦らめたから好きだったことも言え

米価にもふれ中年のクラス会
大阪市　里　小路

引返すだろう老眼忘れてる
頭洗っただけで医者に叱られる
河内長野市　井上喜酔

まだ当分辞めそうにない好敵手
お目玉を覚悟で来たのに酒になり
堺市　高橋千万子

顔色で素手で来たわけつかみとり
素人と見せるおしゃれにひまが入り
大阪市　藤田頂留子

値上りの野菜へ秤にらまれる
安らぎは般若心経誦する時
七尾市　松高秀峰

良緑も年頃らしく拗ねている
口程にない先輩のゴルフなり
愛媛県　嶝本満子

しのび逢うスリルもないまま年をとり
ババ抜きと聞くのも云うのもイヤな年
京都市　大久保和三郎

朝の茶にきょうの姿勢をととのえる
きょうはもう過去のページぞ灯を消そう
桜井市　岩本雀踊子

自嘲する心を友に叱られる
炬燵にでもはいってなはれと邪魔がられ
八尾市　宮西弥生

病欠にしといてデート先に待ち
感情をかくす女の黙否権
京都府　福村飛龍

いいかっこしたい言葉となって出る
混浴と言う温泉もゆくプラン
竹原市　出島静波

無理を承知です返答迷わされ
早魃へ水車音もなく止り
守口市　池田豊平次

知らぬ振りしている母の眼のすずし
家計簿に雑費となってへそくられ
竹原市　三宅不朽

ひとり飲む酒なお白く白く秋
母の肩たたけば童話甦がえる
大阪市　奥川継之助

はっきりと異性を意識した出会い
負けん気が強うて独身かと聞かれ
小松市　四方天弘実

子の病気腕白でよし駄々でよし
老弱の父の手とれば指の冷え

藤井寺市　古結　アキラ

子を失う

満中陰心経やっと空で読め
はぐきやせ五十路の坂を越えんとす

鳥取市　河口　忠志

才女でも夫には勝てぬ稼ぎ高
寒月へ地蔵無想におわします

鳥取市　藤本　和宏

故郷のよさを強雨がつぶしに来
颱風へみの虫落ちまい揺れて耐え

鳥取市　鈴木　村諷子

炊煙のたなびくだけは平和郷
忙しさをかこち忙しさを希い

羽曳野市　麻野　幽玄

退院決定

よく我慢出来たと思う日々も過去
混浴に出会うも旅の気紛れか

諫早市　原田　明春

空腹が母のかえりをすねている
名月の方もアパート邪魔になり

泉佐野市　大工　チヨ

松茸料理テレビだけで秋を越し
子の自慢無口な人もよくしゃべり

竹原市　脇本　政巳

どう善処したのか二度目の土手が切れ
ふりむけば妻だけ一人ついて来る

広島県　高橋　鬼焼

言いかえす妻がやっぱりにくまれず
掛軸のよめないままに宿を立ち

大阪市　大谷　重夫

好き嫌い云ってもみたい下宿
色んなヘソ並べて子等が西瓜喰べ

堺市　青野　遊仙

持った事ないのが金をけなしとり
喘ぎつつ生きる病後を羨まれ

善通寺市　伊藤　歌子

心ない船波間の満月くだいてる
扇風器御苦労さんと片付ける

高知県　山川　勝子

不思議にもあげ底でない土産もの
さば天は可愛いがっても刺を立て

大阪府　高橋　竜天

給料前やけに目にしむネオンの灯
炊事番又俺かいな共稼ぎ

大阪市　宮本　地楽

見られてはまずい日記が見つからず

骨おしみする連中がストに起ち
大阪府　葛城　勝太郎

心にもある事云うて叱られる
鳴子より排気怖いと雀族
姫路市　大久保　大夢子

片仮名のわからぬ料理食べてみる
大阪市　梅園　摩耶

タクシーに乗って話題を変えてみる
大阪市　堀口　欣一

帯しめるときに女の匂う妻
北九州市　藤田　独楽

ヨーグルト一本買って道を聞き
堺市　斎藤　亜也

子供らには勝てんと猫庭へ逃げ
島根県　大森　孝華

やせすねをかじってくれる孫が増え
熊本県　北川　一進

編捧の先へ嬉しい日を教え
大阪市　伊藤　一雲

国会を真似て法政深夜劇
羽咋市　三宅　ろ亭

盲判ではなかった知っており
高槻市　山田　スミ子

おそく来て早く帰る義理
大洲市　堀内　暁風

年寄の頑固それだけ達者です
鳥取市　小谷　章代

伝言が届かぬばかりに誤解され
鳥取市　山本　珂也女

地味すぎた昔の着物をほめてくれ
寝屋川市　福富　隆子

一杯の勢次々からんで来
倉敷市　川端　柳子

もう一度相談したい脈があり
泉佐野市　大工　静子

真夜中のサイレン一応雨戸明け
青森県　岩淵　一星

座布団を枕テレビに長うなり
仙台市　川村　映輝

大学に入り口紅ねだられる
笠岡市　谷本　鈍愚坊

夕凪に焼場の煙地をほうて
高知県　岡本　香芳

もつれてる糸はすねてる姿なり
東大阪市　本多　光子

賽銭を借りて就職おがんどき

・詠　近・

大阪市　橋本緑雨

入替えた襖去年のシミがつき
朝刊も読み終らぬ散歩に出
一枝の柿秋を子に聞かし

小松市　山上千太郎

宝石に身の程わらわれそうで去り
議員さんになると博士号俗化する
思いつめた事が嘘のように明け

大洲市　米沢暁明

もろともに哀れと思う不合格
引越しの琴は一番あとで積み
ブローチも鏡の中で選ばれる

今治市　月原宵明

本堂の藪蚊に禅のままならず
来てやつた貰ろてやつたと喧嘩する
仏壇のあなたと二人子は巣立ち

盲目抄

高鷲亜鈍

幸二は、同じ年頃の腕白小僧達が雪合戦しているのを、一人離れて、ふところ手で見ていた。幸二は、その雪合戦に加わりたかったが、風邪気味なのと、幼少の頃から、里子に出て育ったせいもあって、内気な性質は、彼自身を一人ぼっちにさせていた。幸二は家の前の田圃に雪が積ってぶあつくなると、一人だけの遊びをするのである。それは冷めたく白い雪に、顔をまともに突込む。すると、一瞬ひやっとした面をあげて、雪の上を見たら自分の面が凹面に型造られていた。そしてこの凹面には、青い鼻汁が二条ついているのがおかしかった。

路郎先生の生まれは、私の住まっている近くで、尾道市の十四日町といえば、山の中腹にある天神さんの石段をおりたあたりであった。農家は、渡舟に乗って向島に着き、一里程奥へ行った農村である。先生は、あまり過去を語らない人で、現に、幼少の思い出話は、ひょっとしたら私だけに、語ってくれたのではないか…。いつか先生に、先生の子供の頃は、向こう意気の強い元気な方でしたでしょうネと、尋ねたところ、そうじゃなかったなあと、前述のような思い出を語られたからである。

★

晩秋の光額へ擦りこまし
自分だけわかる点字を案出し

陽春くれば春の光りのかげとなり
こころ更まり新春の光を拝む
お詣りもそこそこテレビが待つてる
水渇くようにこころは灯をもとめ
目には目をああ永却の石と笛
三日目に拾うた犬に瓶められる
小犬からみたらめくらとおもうまい
しつかりと犬のあたまへいいきかし
オリーブの実をカリブ海に沈め
夕日を浴びて黒人胸をはる
カプセルのなかであわびのひとりごと
アンテナに海女の湯文字がひつかかる
ベトナムの業火は尼僧の乳房を焼く
ヨルダン河で水死体となるヨハネ
地球儀の世界は黒の張りぼて
審判は火の海と化す世紀末
栄光のコメットならぬ紙しぶき
不憫さに慣れてすぼめる肩と首

堀口大学氏と語る

―特別寄稿―

阿部佐保蘭

一九六六年三月二十日、葉山の海辺に近い蕭洒な和風の二階家に棲まわれる詩人堀口大学先生のお宅をお尋ねした。風の強い日でしたが、よく晴れて気持のよい潮風の中を、梅も綻ぶ思いでお伺いする。丁度お彼岸で、親父（故堀口九萬一先生）の墓参りをすませ昨夜遅く帰宅されたとのことで、暫く待って呉れとのことで、その辺を一廻りして再び訪問二階へ通され、南向きの和室で待たせて貰う。間もなく和服姿で出て来られた先生は、七十四才の高齢とは思えぬ白髪一つない相変らずの若々しいお姿である。憶えば、河口湖畔に初めて先生をお訪ねしてから早二十五年の歳月が経っていると云うのに……。そこで先生に、その若さの秘訣をお伺いした処「君欲を出さんことだよ。欲を出すと、限らずやられる（身体のこと）欲を出さんことが長寿の秘訣だよ。僕は現に随分年下の女房と暮しているが、怠け者だから、楽なことが好きな者ですから、どうやら生きている。五十才の時から老詩生（あんまり若造に見られたので）と自ら名乗っている。尤も現在それにふさわしく年取ったが。」

先生は父上（元特命全権大使）が、東大の学生の頃にお生まれになられ、大学と命名されし由、即ち大学は雅号でなくて本名であられる由。若い時のお子さん故、いつ迄もお若い訳である。閑話休題。これより本題に入らせて戴く。

先生の云われるのに、川柳は、矢張り所謂川柳らしい川柳で進んだ方が、いいんじゃないか。高級化すると、川柳は発句になる。川柳。あんな面白いものはない。ただ川柳の翻訳となると、外人に理解させるには、仲々難かしい。俳句、短歌は、自然が対象の場合が多いが、川柳の場合は、人事が主だ。日本人の生活が主に詠われる。生活の伝統感覚も違う。この違いがあるので、俳句や和歌より解り難い。川柳も仲々日本人にも解り難い処もある。分らんのも随分ある。例えば仏人ポール・ルイ・クーシュー博士訳の

口説かれて給仕は盆へ渦を巻き　古川柳

Press' eepar je ieune homme,
La Ser Vante
Trace une Spirale

この句を訳すと、「若い男から迫られて下女は螺旋状に廻っている」となり、盆が消えている。盆があるから給仕が生きて来て詩になる。NOTEとして盆を説明してみたら如何と申しあげたら、説明して分ったのは詩でない。とにかく先生の云われるのに、川柳を翻訳する時は、その句の選択が大事でしょうね。外人にそれが理解されるような。

宮森先生の英訳川柳の載っている〃SHK〃第一号をお見せする。

美しい儘でこの世を露は消え　角恋坊

写生句ですね。川柳的妙味は少ない。

渡舟花屋は蝶を連れて乗り　角恋坊

以上の英訳川柳は、私には批評の限りではありませんが、前句は川柳としての面白味は感じとれない。後の句これなら幾らか分るが、川柳というものは難しいもんだ。上品に高級にしようとすると（それも当然ですが）俳句化する。それならば、人情味ある俳句を作ればいいんじゃないか。

宮森さんはもう亡くなりましたか。宮森麻太郎。万葉集を英語で訳した人でしたね。愛国的な行動をなすった方ですね。そうか。そうか。あの方かと、宮森先生を憶い出される。川柳はむずかしいですね。僕には俳句より難かしいですね。

日の暮を我が家の溝も流れおり　雀郎

雀郎。この人うまいね。これなんか立派な発句です。

子供は風の子天の子地の子　三太郎

ほんと。これは川柳ですね。

も一つの自叙伝闇へ指で書く　三太郎

これはうまい。

叱られて拾った犬ともとの場所　三太郎

うまい。これは川柳ですよ。発句じゃない。

桜草摘めば摑めそうな風　三太郎

この句は川柳久世山の夕に三太郎先生が寄書に書かれた句です。佐藤春夫先生もあの時生まれて始めて川柳を作られましたね。

何が咲く新体制に腹が減り　佐藤春夫

あの寄書は焼けちゃった。あの家は戦争で、みんな焼けちゃった。三太郎さんは、ずっと読売の選をして居られる方ですね。川柳五十年史をやって居られる。

うたてなく云いたい愛しちゃったのよ　北村栄造

あはははは……北村君なかなか筋がいいじゃないの

天皇のお馬やっぱり器量よし　北村栄造

ははあ……（佐保蘭曰く。この北村栄造氏は、私達の俳諧かおる会へ最近入られた方で神戸製鋼勤務の方で中央公論事業出版から既に四冊も、随筆集を出しておられる江戸っ子の方）昭和三十八年に中央公論事業出版から、私が出した川柳句集〝鶴の姿〟のことにも触れる。これなら高くありません。（小生が一部六百円かかったのを、頒価三百円で出したことを申しあげると）尤も三十八年だから、今よりは物価が安かった。その代りよく出来てます。表紙に和紙を使い本の表題〝鶴の姿〟を金文字で〝TSURU NO SUGATA〟と出した。（佐保蘭註――これは路郎先生が出された句集〝旅人〟の表題を先生の許可をうけて真似させて戴いた憶い出のものである）和紙は和紙の味で汚れませんよ。いっそビニールのカバーは除って了った方がいいですよ。和紙というものは世界一贅沢なものだ。私は奈良の菊屋の包紙でも大事にとっています。和紙の味はわし（俺）だけが知るですよ。この会談は先生の許可をうけテープにとらせて戴き、記念に丁度お部屋に飾ってあった佐藤春夫先生の大いなる色紙――これには

ありし日の荒びのさまは

ふもとなる五つの湖に
あととめて、富士の高嶺や
時じくの雪はうづもれ
粛として青雲に立つ

湖五つ

その若き日を忘れかね
君にひれ伏し、かしづけるらん

佐藤春夫（印）

と、書き誌されてあった。

この色紙を左に持たれた先生のお写真を記念に撮らせて戴く。有難きこと哉……

話はこの外に吉川英治先生のことから、菊池寛が作った川柳のこと

号外も田端へ来ると歩み出し　菊池寛

にも触れる。（昭和十六年九月二十二日付菊

池寛より一高時代の親友川柳家で医師の小杉白秋氏宛ハガキに依る）

岡田甫さんはどうして居られますか。この方には、僕が副会長をしていたペンクラブの書記をして貰ったことがある。末摘花の研究家で、学者風になり、色々精通して居られますね。（佐保蘭曰く、岡田甫氏は最近「定本誹風末摘花」を有光書房より出版され、ごく最近お逢いした時の話によると、二三日中に鎌倉の新居に移り、愈々岩波から出る約束になっている〃川柳史研究〃の書下ろし三千枚位、A5判千頁位の予定の執筆にかかられる由）続いて話は先生の父上（筆者はこの父上に気に入られ、小石川の久我山に居られた頃よく電話がかかり、お伺いするといきなり書斎に通され、川柳の話をよくさせられたものです。もと特命全権大使をされた有名な外交官で、路郎先生の〃川柳雑誌〃を五十冊お貸ししたのであるが、これはあの戦争の時焼夷弾で先生のお家が焼かれたので、灰燼と化したのは今もって残念でならない）のことに移る。親爺（堀口九万一先生）は仲々積極的でした。健啖家で健康だったから。おやじの俳号〃全田月〃と云うのは僕が冗談につけたので全部胃と云う意。外交官で胃が丈夫だったから、全田月としたらと云ったら、おやじがそれは面白いと云う訳で俳号にした。別に花林洞と云う号も持っていた。これは親爺が、支那の詩集を読んでいたら李白、杜甫以来詩で一番いいのは歯切れのよいのが一番だとあってお菓子の例が引いてあった。そこで森雞牛子へ最初音のする菓子がいい。音を喰うものだと云うので歯切れのいいカリン糖としてやったが、これでは不真面目故、雅号として花林洞と直し、川柳界へ出す雅号に用いられた由。おやじのもといた東京小石川区（今の文京区）大塚久世山の住居は空襲で焼けて現在あそこは道路になりました。曲り角の処です。親爺は自分の家は焼けないと云う変な確信を持ってました。一山に焼けて了いました。親爺は長岡藩士で堀口家九代目の貧乏侍（下侍）の子で、四才迄小さな刀をさしていた。（四才の時廃藩置県になった）川柳は好きで、文芸春秋その他へよく書いていたようです。お寺（長岡市の禅宗のお寺）は焼けました。八十才で歿し、戒名は〃知道院一向居士〃です。

佐保蘭の「先生は現在何をなさって居られますか」の問いに対し、先生は「何もしていません。私は怠け者（からだの弱い故もあり）で、楽なことが好きなものだから」先生は現在七十四才であられる由。再来年が喜寿にあたられる。今年の宮内省御歌所の御題の選者であらせられ、朝日グラフ新年号に〃長寿〃と題する元旦の詩をものされた。その詩が大変いい詩なので、小生はそれを座右の銘として愛唱しているのであるが、ここにそれを誌させて戴き最後の〆くくりとさせて貰います。

老いてすこやか身の果報
親代々の贈りもの
石の上にも五十年
馬鹿ととなりの初一念
暮しのほどは貧しくも
心に富めば事は足る
余白の生にあそぶ身に
不死の薬は望まない
眠り薬に詩の本
朝寝に朝湯朝まいり
ひたいの皺は花に見せ
梅をこころに茶を飲まう
聞えぬ耳に聞えるは
昔うれしいひとの声

近詠

阿部佐保蘭

中野正剛を日蓮様に視る
還歴へ良寛様になれたらと
いざと云う時を達人知っている

若本多久志川柳句集
「老いの坂」
柳歴四十数年の著者が世に問う巨篇。
序文、中島生々庵主幹。B6版美本
実費四五〇円　送料七〇円
★
若本多久志著・川柳句集
「親ごころ子心」
実費二〇〇円　送料六五円
申込所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇
川柳塔社あて

近詠

麻生葭乃

なら山へ近づく日々をワルツで歩るく

メモリーはめらめらめらと火に消えた

仏さんと云う名でピントはずしとく

テレビ見る都合掃除は二部制度

河内平野ここにも煙吐く市街

神戸牛松坂牛と食われけり

重心のおもさ立つたび座るたび

おいらん草尾羽打ちからす色で咲く

短　冊

本誌の創刊当時、生々庵主幹は選句信条として〝短冊に書けるような句〟つまり品のよい句をとりたいといわれた。また西尾栞氏は〝短冊に書く場合を考え文字にも心をくばって作句する〟といわれたことがある。

活字だけに生きてきたぼくには、どうも短冊には興味がなく、ブスイきわまるのだが、そんなぼくに短冊をくれといってくださる人もある。だが、まだ一度も書いたことがない。句もないが文字もまずいというのが本音だが。

だから短冊をこれまでどなたにも頼んだことはないが、ことしはじめて葭乃先生におねだり申しあげた。

かたつむり狭いながらも一戸建ち　（葭乃）

そのころ住宅難をテーマに台本を書いていたがそのなかにカタツムリが出てくるのである。いつもぼくをはげましてくださる先生の、この〝かたつむり〟の玉句から先生のムチの叱咤を感じたのである。

（不二田一三夫）

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

豊臣秀吉（二）

草履取

永禄元年（一五五八）の秋、織田信長が、小牧山に狩して、清洲へ帰りの途中を待ちうけて藤吉郎は、直々に仕官を申込み、抱えられて草履取りになったのは、二十三才の時に当る。

信長へお国者だと申し上げ　（五5）

信長も藤吉郎も同じ尾張の産であった。

藤吉は先主を届けなしに住み（天四智3）

遊興の場所で藤吉御かかへ（一一二30）

大木の蔭へ具足代持つて逃げ　（天八・一〇15）

信長は日本一の猿つかひ　（一〇三18）

藤吉郎は猿に似ていたといわれ、後にも秀吉を猿と詠まれている。

草履取りとして勤務振りが素晴しいので、翌年には抜擢されて、三十石取の侍になった。それからだんだんと出世して、遂に関白にまで昇進したのである。それで、

草履から猿冠へはい上り　（八六2）

さる人の系図をきけばざうり取（三八39）

ひつかかぬ猿だんだんと位つき（八五32）

と狂句に作られ、また、

ひで吉のつとめたころはちらしめし　（七42）

太閤記折助はてなはてなり（一四一33）

折助がはてなと思ふ太閤記　（八五37）

後世「太閤記」を読んだ草履取りも、同じような夢を持ったであろう。

ライバルの明智光秀は、藤吉郎より後、永禄九年に信長に仕えたのであるが、年長でもあり、

あいつめはもと黒鴨と明智いひ（拾六）

取にげをしたやろうめと明智いひ　（明八鶴2）

といったかも知れない。黒鴨は黒づくめの服装の下僕の異名である。

藤吉が智恵十兵衛をお先きにし　（一〇九45）

十兵衛は光秀の名である。

洲の股の一夜城

洲の股は、長良川の西岸にあって、美濃路から尾張へ入る要衝にあたるので、信長は、美濃の斎藤への押えとして、此処に築城を企て、佐久間、柴田にそれをやらせたが、工を終らないうちに、二度とも敵に破られたので、三度目に、新参の藤吉郎に、その奉行が命じられた。

藤吉郎は命をうけて、はじめ紙や胡粉やツノマタなどを使って、張り抜きの城を作り、敵の目を驚かせておきながら、工人を優遇して十隊に分ち、各々持場を定めて競争して本式の工事を急ぎ、わずか七日の間に立派な城砦を築きあげた。これを「洲の股の一夜城」という。これは永禄二年（一五五九）のことで、藤吉郎が侍になった年であるが、この功によりまた増俸されたのである。

城ふしん手はづをくばる猿眼コ（四八11）

きやつきやつと手はづを配る割普請　（五九14）

一ト晩に城をきづきの紙ではり（九三31）

洲の股の城で不審を敵もたけ（六三30）

と川柳は詠んでいる。

羽柴秀吉

美濃油しぼつて継だ稲葉山　（八一6）

尾張勢先づ油屋を攻めつぶし（一五12）

「日本外史」には、

「信長は、既に今川氏に克ちて尾張を定め、西の方斎藤氏を美濃に攻めぬ。洲股河を越えて兵を用う。藤吉は戦いて功あり。信長は藤吉に一旗を賜い、名を命じて秀吉という。ついで筑前守に除し、氏を羽柴と更めしめぬ。

秀吉は桐を以て号となし、金瓢を以て馬表となし、一捷する毎に一瓢を加う。曰く、

「われは必ず積みて千に至らん」と、因て千瓢と称せり。」

と書いてある。時に藤吉郎は、信長に仕えて十八年目、天正三年（一五七五）四十才であった。「羽柴」は、織田家の二豪、丹羽、柴田の、一字ずつを取ってつけられたのである。

羽根と柴貰って武勇世に秀で（安六満1）

千成の初物を見た稲葉山

稲葉山の斎藤竜興を攻めた時、秀吉は、間道から進み搦手に達し、酒瓢を竹の先につけて打振り、大手の寄手に合図をして、城を乗取ったのであった。これが「千成瓢」のはじめである。

瓢箪で鮟江の城押へられ　（九九16）

天正元年（一五七三）江州の六角承禎が、長光寺の柴田勝家を攻めた時、秀吉は六角の牙城鮟江を潰して降参させ、勝家を救うたのも瓢箪にして川柳は作っている。

水谷鮎美さんをしのぶ

吉田水車

川柳雑誌不朽洞会員として鮎美調の句で活躍した鮎美さんの訃を報じた川柳塔十月号を手にして、また柳友の一人を失い暗然としておもいに沈まずにはおられなかった。

君はまことに友情に厚かったことは、かって川雑梅田支部幹事として指導したのは勿論よく部員を統率し、ひいては社員に及ぼした良風を多として勤務先会社から表彰を受けたということからでもわかるのである。川雑同人として数年も後輩の私をよく導いて下さったのに対して今日碌々としていまだその厚誼に酬いることも出来ずにいる私をかえりみて恥しい思いがする。

芝居好きな君はまた劇通として、共に亡き里十九、夕鐘、かほるの諸兄とよく語り合うたものであった。折々浅酌の席で君の得意の「薄墨」はその美声がまだ私の耳に残っている。またスタイリストでもあったことは当時流行したダブルのオーバーの着こなしも板についたものだった。

鮎美調の句は川雑の異彩として、君の澄みきった句境はまた仏心にも通じるものであろう。残された数多い佳什のうちから感銘のものをしるして追憶のよすがといたし、ご冥福を祈る次第である。

合掌

幻は消えて欄間の仏達
君雲を話す心になり給へ
おちついてゐればねづみにのぞかれる
鴈治郎鼻のあたりに祭の灯
築港に軍馬の目玉動きたり

弔吟

君もまた恩師のもとへ急ぐのか　水車

ふあうすと同人、故水谷鮎美氏の追悼句会が、十二月十日正午から尼崎市労働福祉会館（阪神尼崎駅北ガスタンク横）で開催。詳細は前号〃柳界展望〃参照。

【大陸巷談】

徐文長の桃

東野大八

彼は、小さい時から文章に秀でていたが、童生から秀才の試験を受けたものの、何度やっても及第しない。

というのは、試験場で余り早いとこ答案が出来上るので、彼は退屈でしようがない。さっさと答案を提出してしまえばよいものを、持ち前のイタズラっけが出て、自分の文章を読みかえして、ここがよくできている、この文章は秀逸であると、自分勝手に傍点や丸をつける。それがすむと一句一句の小評を入れ最後に総評を書く。この答案は大層よくできているから、本日の第一等にしなければならんと試験官の記入する等級の欄へ自ら第一等なりと書く。

こんな調子だから、試験官はみんなアタマへきて、第一等の価値はあるのだが文句なく落第にしてしまう。あるときなど、あまり時間が多いので、余白のところへ祖先からの神像をずらりと描き、秀才になった自分が祭壇にお供えをやっている絵を描いた。

こんな調子のわが子を心配した彼の母は、ある日ゆで豆を彼に与えた。大好物のゆで豆なので、彼は大急ぎで答案をかき、ゆで豆をゆっくりと平げた。おかげでいたずらの時間がなくなり第一等でパスした。

この人は姓は徐、名は渭、字名は文長で、晩年は青藤と号した。浙江山陰の人で明の正徳十五年（一五二一年）には、浙江省総督胡宗憲の幕客となり、総督の代筆を彼が一人で勤めた。時のミカド世宗は、胡宗憲の文筆をかって宮中に招こうとしたが、彼は代筆はすべて徐文長である旨奏上した。改めて世宗から文長に金帛を賜わり、宮中の高職に迎えたいとの勅使がきた。だが文長先生は、

「私は胡総督の影なのだから、彼と離れるわけにはいきません」

と断った。やがて胡総督は、ある汚職事件の責任を負って庶民に下げられた。同時に文長も巷間の一浮浪者となり、清貧の中に奇言奇行を演じつつ死んだ。

奇才徐文長の面目は、この放浪の生活の中に発揮された。

土地のさる富豪の祖母が、長寿の祝いをやりたいが、ぜひ、文長先生の一筆が欲しい、という。この金持ちのばあさんの頼みを、二つ返事で引き受けた文長は、十人に限りわしの彩管による画を頒ちたい、といった。詞文や絶句なら国中でも有名だが数は多い、その人が画を描くというのだからこりゃ珍らしいと、大金持は大喜び、早速金持仲間で市がたつほどの騒ぎとなった。かくてその日になって文長先生いわく、「画境は静閑を要す、私一人の別室の用意が欲しい」

ごもっともでと一室が準備され、先生はカギを下ろしてその中にこもった。やがて一束の紙幅を携えて現われた先生「画境大いにふるって二十枚もできた」どれどれと人々が争ってみると、一抱えもある雄渾な桃の実が一つ。それがみんな判んこで押したようにおんなじ図柄ばかり、しかし人々は先を争って金を払い合いてんで大喜び。

やがて宴会になった。ところがくだんの画を床に飾った一人が小首をひねりながら—

「先生、この桃の実は、実を下げるほどの形が変ですね」

といい出した。おみきのまわった先生はから

からと笑って、
「なるほど、妙な桃だな」
と他人ごとのように笑いながらいわく
「皆さん、白状しよう、この桃の画は、実は筆ではない、筆のかわりにこれを用いた」
とくるりと後向きになりズボンを引き下げた。なんとその丸いお尻は墨でまっ黒。
「ほぞがおかしいのは、ほらこの前の道具ですませた」
と今度は前向きになって、股間にぶら下ったものを示し、長居は無用と、大急ぎで消えうせた。そして、金持ちどもの金を、彼は残らず貧乏人仲間にくれてしまった。
紹興の常喜門外の魚屋のセガレが秀才に及第した。秀才になった以上、試筆を印刷して配らねばならないが、慣例上必要な号の書室がない。そこで親父が文長先生に室名の名付け親を頼んできた。先生心得て立ちどころに王衡山房と書いた。その室名は、まことに古雅であると町中の大評判になった。
「ちと、魚屋にしては分にすぎてるようだ」
とある人が先生に問うと、
「お前はわからんか、魚屋のコトをここでは魚行王というではないか、その三文をもじってつけたまでよ」
ある日、先生とこへ、町の悪友の一人がきて、長い竹ざおを示しながら、この先っぽに肉二百斤がしばりつけてある。この竹を倒さず、踏台もおかず、上の肉がとれたら肉は呈しますという、わけはないと先生、その竹ざおを井戸に持ってゆき、そのサオをその中へ入れて、有難く肉を頂戴した。
ある旧家の召使いが、手紙をもって先生宅へきたが、門口を入るなり横柄な態度で
「うちの御主人がお前に用事だとよ」
と手紙をポイと投げ出した。ムッとした先生は、手紙を読むと「お前の主人が、オレトコの石臼を借してくれといってる」
仕方なくその男はウンウンいって臼をかついで家に着いた。主人はそれをみて、さては先生を怒らせたな、と悟ったが、叱るかわりにこう命じた。
「もう要らなくなったから、すぐ返しておいで」
徐文長伝は柳味横溢の小ばなし集だが、その原典は、中国のおばあちゃん、おじいちゃんの孫たちへの話を集めたものらしい。日本の桃太郎式の寓話の一つ一つを文長先生に托したものともいえる。随って文長の実伝かどうかは疑わしい。私の蔵本の徐文長故事は、周作人編となっている。
日中戦争頭初、日軍の占領地域内華北の知識層の間で「民間へ」のスローガンが叫ばれ、中国国学上の懐古運動が展開された。徐文長伝はその一つの現れである。今考えると、日本軍政下にある中国民衆が、人間味あふれる徐文長の反骨や行動に、被征服者の心境を托したもののようである。私にはその気持がよくわかるのである。ともあれ徐文長は時の中国民衆のアイドルであった。そして私自身のアイドルでもある。なぜなら、私も尻で桃を描いて金持に売り、酒が飲みたいからである。

近詠

須坂市　高峰柳児

手内職ストしてただ今倦怠期
老いの眼は歪んだ民主主義をつき
レジヤ優先洗濯ものをため
天下り人事蔭口だけ達者

今治市　長野文庫

社長室空気も余り動かない
自動車の目に自転車がこうるさい
聞けばそう読めないことはないサイン

和歌山市　秋月宏方

貸植木水を飲みたい日が続き
ある時は離婚話も聞くベンチ

初歩教室

題「雑草」

菊沢小松園

本月の題も川柳としては、やや難題だとおもう。少なくとも初心者向きではない、しかし私としてはどんな課題にも動ぜぬ練習の試金石として貰いたかった。それだけの微意に他ならない。

雑草も精一ぱいの花をつけ　正朗
きれい好きだったお墓を草もよけ　芳子
大学の自由のかげに雑草のび過ぎた　静観堂
雑草へうつかり虫の声途絶え　破天
踏まれてから雑草はなお強く生き　チョ

①植物に庶民の逞しさを見たのであろう、人の気附かぬ雑草にもなお虐たげられた者の努力は花まで附けている。②生前きれい好きだった仏へ雑草も墓のぐるりは避けたであろう、展墓の人達の思いやりが伏せられているところが、この句の生命であろう整った句である。③時事吟である、例の大学の騒動を皮肉って雑草にしたところは手柄である、パンチも利いていい句になった。④咏み古されて損、至極あたり前のことで凡々の譏は免れまい。⑤これも同様、但しこの句の「なお」はよく利いている。

雑草も明日ある夢へ花をつけ　睦夫
売り急ぎせぬ地へ雑草遠慮せず　悦子
雑草に根強い生き方教えられ　軒太楼
雑草を囲んで地価の上りまち　比呂路
雑草のもつ哀れさの枯れすすき　英詩
雑草の根性ほめられつつ刈られ　同

①類想は多かったが中七でやっと頓死は免れた。②空地の雑草は沢山あった、これも上五でやっと一本立になったちょっとの突込み方の相違で句は生きる。③この句の生命は中七にある、ねばりの強さが命だ。④これも前掲同想、但しもっと突込みがほしい。⑤雑草の持つ宿命の哀歓は出ているが線が弱い。⑥この方は面白い、そこに働いている人達の動作も想像できる、即ち中七の用法にある佳句

雑草へなぜ大そうな板囲い　保夫
雑草よお前も強く生きてるか　万竿
雑草が根で殖え実で殖え茎でふえ　白汀
人の手を借りず雑草実をつける　秋女
雑草の踏まれたまんま花をつけ　同
雑草も生きて広島蘇り　露芳

①中七が面白い社会批判もよく利いているユーモアの中にきらりとしたものを感じさせる。②この創り方に問題はあろうが、独善的であるだけ力強さは感じさせる。③雑草の持つ頑強さを畳掛けでよく現わしている。④肥料だ水だ摘芯だと人の手厚い保護によってやっと実のりを、向えるものに対して雑草の強さをよく表現している、捨て育ちの貧乏人の子供の頑健なように。⑤これも同じ傾向ながらよく纏って成功している。⑥原爆の広島の復興を雑草を通じて句にした、今日では古い新聞を読んでいる感じで句材で損。

ハイキング食える雑草教えられ　遊仙
手を抜いたとこだけ雑草ちやんと伸び　露声
雑草の跡かたもなくビルが建ち　弘実
ビル街につとめ雑草なつかしみ　愁電子
病み上りほどよい仕事と草をぬく　正直

①牛馬の食べる草なら人間もたいてい食えると教わったが句としてはこれだけでは平凡何かもっと具象の事実と噛み合せて鮮明にせなければなま温い。②いい古されている事でも用語の面白さで句が生きるという例句になる。③日々新らたに変貌する都会の現実は雑草の空地に何時の間にか堂々たるビルが建っていたというのである、雑草の生えている空地の頃の懐しさも想像されて面白い。④ビル

の谷間に区切られた息詰まるような空を眺めながら日々のしがない勤務の傍ら雑草一ぱいの野辺を懐しがる都会人の郷愁がよく窺える。⑤これもありふれた古い想中七に句にしたい気持ちは判るが底が浅い。

踏まれても育つ雑草に四季を知り　誓二
播いたもの生えず雑草ばかり増え　秋月
雑草の意地は伸びるだけ伸びる　同
せめてもの住んでる証拠雑草を抜く　初甫
草抜けば根性土を抱いたまま　湖平

①雑草ほど強い踏まれても毟られても野生の逞しさその有様に四季の移り変りを知らされている、勤め人の往き来の感懐か。②よくあること、これを人間の社会に嵌めると面白い折角期待した子供の素質も目的の方面には伸びず反って脇道へばかり興味を持って来る場合にも当て嵌ろう。③抜いても毟られても意地のように伸びる雑草、それも人間から見た場合であって雑草自身では生きるための限度の抵抗であって決して意地や張りの余裕のあるものではない。④うらぶれた人間のせめても心意気のようなものを覚える、昔日の栄華に較べて今は訪れる人もないせめても生きている証拠に雑草だけでも抜いておく、あわれ秋風よといいたい。⑤無理に抜けば草の土根性は千切れた根もとにしっかり土を抱いていた、弱いものせめての抵抗の現われか。

雑草のままで宅地の値が決まり　鉄舟
むしられてもむしられても雑草根を増やし　千代
ビル予定地と知らず雑草生い茂り　同
事故で踏み調査で雑草ふみにじり　光道
雑草の中に菊咲く屋敷跡　花子

①宅地が売れたのである、しかも雑草生い茂ったままで、雑草を抜いて整地して売るだけの時間にも心にもこの地主には余裕がなかったのであろう、栄枯盛衰の果敢なさもこの句から汲み取れる。②句に現われてるそのままで雑草の性質の説明に終ったのは遺憾。③ビルが建つまでの暫くの間の営みとも知らずに雑草はわが世の春の茂みを見せているというのである、白露や無分別なる置きどころの境地か。④雑草の生れながらの果敢さを現わしている、無抵抗な庶民の姿にも似ている。時局のベトナム戦争も思い出させる。⑤これも昔栄えた旧家の跡とも取れる、築地くずれ土塀傾き果てた中に雑草生い茂って狐狸の住家とも見ゆる荒寥たる景、野菊一むら美しく昔を語り顔に咲く、美化すれば一幅の哀史である佳句。

雑草の力がほしい病上り　す き
何度芽を出しても雑草引き抜かれ　同
憎まれても雑草根をはり花もつけ　亜也
踏まれても雑草の意地跳ねかえし　微也
雑草の力は伸びて縁の下　若芽

①これも前掲のある句同様、想も古いし誰しも思い附くところで損。②これもやや同様のことがいえる、上五でちょっと救われてもいるがこの作者例月から見て奮起を望む。③これも咏み出しの上五の割に平凡に終った。④雑草は踏まれるものとの常識から見ると損な句、僅かに下五の力強さが取柄か。⑤雑草の茂みが縁の下まで伸びて来たとは都会の者には想像も出来ないが地方ではこうしたことがあるいはあるのかも知れない。

以上本月は何れも総体に低調の評は免れないだろう、もっと問題に仕甲斐のある句を寄せる努力をしてほしいものである。

雑草のそよぐあたりを秋という　旧作
花つけていても雑草毟られる　小松園

四十三年一月二十日締切・三月号発表
題「表情」
宛先
大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号
菊沢小松園

★前号「はたらくうた」河原みのる氏の第一句を「道楽の粕がアレアレ金になり」文章六行目、花弁は「花卉」十二行目、亭は「享」と訂正。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二 — 四
夜間 (762) 四四〇八

第百九十七回　（復活第二回）

大萬川柳

「ストロー」入選発表

選者　清水白柳
投句総数　五百七十九句
入選　五十六句

ストローの先で頬べた突つき合い　岡山　七面山
むしゃくしゃへストロー捨て飲むソーダ　鳥取　征也
ストローの孤独氷に孔をあけ　倉敷　好啓児
ストローの位置を死角にかえる　笠岡　要次
ストローへインスタントが溶け残り　桜井　雀踊子
飲んでからストロー気づくほど喝き　鳥取　章代
ストローはまだ吹くだけの孫の口　大阪　小路
ストローを吹けば虹ありシャボン玉　加賀　一路
言訳をするストローがよくむせび　岡山　秋月
ストローの指に見合いの眼を逃れ　米子　千代
ストローへ子供の椅子が低すぎる　大阪　形水
ストローで飲み合う二人へ陽が沈み　神戸　どんたく
ストローのまんま女房へ飲み残し　鳥取　日満
借る方のストロー一口遅れてる　大阪　弓彦
子のストロー母のコップへ遠慮がち　米子　花子
拗ねている指にストロー巻かれてる　岡山　照路
ストローのキスに濡れたる唇と知り　八代　銀風
ストローに馴染まぬ母と旅の椅子　大阪　水客
ストローをふみつけ恋はそれっ切り　大阪　マサエ
プロポーズされてストローへ眼を落し　宝塚　ゆきを
花嫁へ母ストローで茶を飲ませ　堺　一舟
ストローで結ばれストローで別れ　藤井寺　吸江
自家製のジュースストロー忘られ　高槻　季賛
虫歯ない方へストローころがされ　篠山　与志
ストローを吸い吸い何処へ連れてこう　西宮　多久志
返済をせまるストロー音高し　香川　酔夢
夢のない男ストロー無駄に折り　大阪　小松園
よい返事まではストローへ指ふれず　仙台　光道
商談成りストロー底まで吸いつくす　堺　青香
ストローを休ませ彼を待つジュース　堺　草春
ストローの先で遊んでいる氷　鳥取　秋女
ストローの母と児の目が笑い合い　島根　正朗
ストローも聞いてしまった内緒ごと　島根　正朗
今度会う日をストローで書いて見せ　京都　杜的
ストローを持つ手も妻と名が変り　京都　杜的
ストローが割れてたような恋でした　堺　草春
ストローをタクトに社長も酔うてはる　平田　代仕男
ストローでみみちく吸うて待ちぼうけ　平田　代仕男
ストローを鳴らし歯切れのいい別れ　堺　草春
ストローの袋も切らずまだ喋り　大阪　静波
シャボン玉ストロー折れてほっとかれ　大阪　静波
ストローで飲む乾杯も少女たり　岸和田　きさ子
パパだけはストローいらぬビールにし　岸和田　きさ子
ストローの口もとノーと云いたそう　岸和田　きさ子
探しものストロー四五本崩れ落ち

営業所
阿倍野店
堺店
住吉店
平野店
都島店
今福店
十三店
九条店
crcdit system
買いよい
良い安い
月賦百貨店
丸越
本社　大阪市阿倍野区帝塚山1—1—21
電話—623—1151～3

大阪　美房

ストローを口にし意見聞き流す
ストローが聞いてる腹の子の話
ストローの先に目が寄るシャボン玉

佳句

鳥取　秋女

パパこつちストローが呼ぶ食堂部

竹原　菁居

ストローが不倫をさとすよ？折れ

大阪　水客

ストローへひとりの時間あり余り

大阪　阿茶

ストローで食卓に書く設計図

大阪　没食子

お勘定場へ立つストローは飲み残し

人ノ句

鳥取　日満

妻以下はストローで飲むもので済み

地ノ句

鳥取　珂也女

なが話ママのストロー取り上げる

天ノ句

倉敷　素身郎

思うこと言えずストローもてあそび

選者吟

灰色の空ストローを意識せず

大萬ベストテン（十一月現在）

（同点の場合は投句先着順）

一	**素身郎**	六、〇 倉敷
二	**秋女**	五、五 鳥取
三	**千代**	五、〇 米子
四	**ゆきを**	五、〇 宝塚
五	**清人**	四、〇 大阪
六	**日満**	四、〇 鳥取
七	**弓彦**	三、五 大阪
八	**珂也女**	三、〇 鳥取
九	**光道**	三、〇 仙台
十	**青香**	三、〇 堺
十一	正朗	三、〇 鳥取
十二	美房	三、〇 大阪
十三	草春	三、〇 堺
十四	吸江	三、〇 藤井寺
十五	十九平	三、〇 岡山
十六	静馬	二、五 富槻
十七	没食子	二、五 大阪
十八	水客	二、五 大阪
十九	形水	二、〇 大阪
二〇	滋雀	二、〇 大阪

以下略

第四回　**「乗り気」**　五句以内
締切　**十二月二十日**

第五回　**「満期」**　五句以内
締切　**一月二十日**

投句先

大阪府高石市高師浜三―五―六

川村好郎

さりげなく別れる

前田芙巳代

若いころに手にした映画雑誌の一ページに、

巧まざる表情をもつ女は
心のやさしい女である
愛は告げやすい
されど別れは告げにくい
さりげなく別れてくれる女は
心のやさしい女である。

誰が書いていたのか、また誰のことをいったのか、もう私の記憶には遠いものとなりましたが、この言葉だけが不思議に今でもすらすらと出てくるのです

私の友人にこれをいったところ それは男性のエゴイズムだというのです。

さりげなく別れてくれる女は心のやさしい女である。

なるほど、友人がいうように、男性のエゴかも知れません。

しかし、「さりげなく別れる」とは素晴らしいではありませんか。私もそうありたいと願っていますが……。

だけど、さりげなく別れるためには、来る日も来る日も悔いなく惜しみなく生きてゆかねばならないでしょう。梅里様の追悼号を読み直してフトこれを思いだしました。これを男性の文字におきかえてみますと、梅里様は来る日も来る日も悔いのない、きっとこんな毎日であったのではないかと感じました。

二等車

辻　圭水選

土産もの沢山買つて二等にし　小四恵子
二等車の窓から遠慮のないおそば　杜　的
反対をされて二等車でハネムーン　鶴　丸
故郷捨てた二等の窓へ月が出る　里　風
二等車で旅費をうかせて子に土産　天　人
超特急にも乗つたと二等車で帰り　光　道
二等車の気楽が好きという社長　恵二朗
二等車の客ビューフェでまだねばり　十九平
二等車の旅はのんびり飲みつづけ　季　賛
二等車に乗れまい妻との真珠婚　礎　山
二等車と見られたくない訪問着　露　声
飲み過ぎただけを二等で帰る羽目　露　声
二等車の窓にも名月ついてくる　章　雅
二等車の差額女房へのみやげもの　アキラ
子の方が負け二等車の母となり　梁　水
二等車の窓で苦学の手を握り　梁　水
二等車で帰つて来たらし母の旅　弥　生
出迎えを二等車で降り慌てさせ　勝　子
二等車で部長は私用の旅に出る　どんたく
二等車のうつぶん窓から一升瓶　白　汀
一生を二等車しか知らずとも　遊　仙
二等車にきめて土産は奮発し　遊　仙
方言で走るローカル線の二等　英　子
二等へは駅弁発車間際にき　宵　明
二等車は立ちんぼう一等車は寝転んで　藤　波
二等車のくつ下の穴も気にならず　摩　耶
二等車らしく女の足が伸び　無　聖
二等車ですかとモーニングが聞かれ　秋　月
二等車の親切窓から荷を助け　瑞　枝
二等車の網棚ごたごたのせてある　素身郎
特急寝台二等車ともいえず　古　方
一等車に聞かれぬ庶民の生の声　軒太楼
二等車に乗つて財布に油断せず　代仕男
二等車でほんとの旅の味を知り　秋　女
ハネムーンこつそり二等で帰つて来　誓　二
二等車は喜怒哀楽を乗せて混み　弘　実
たまさかの孝行二等の満員車　健太郎
二等車で旅費を浮かしてバーで飲み　双　楽
二等車に乗つて二等車の欠伸　七面山

佳

冥福を祈つて二等車事故地点　中学和宏
二等車の疲れふつとぶ迎えよう　中学和宏
二等車をでしやばりの子もう喋べり　露　声
真心に触れて二等の旅たのし　秋　女
二等車だけれどと母を招く文　千　代

人

二等車に赤帽そつぽを向いて立ち　英　詩

地

旅費浮かす気の二等車ですられ　芳　仙
天
産みにゆく今日は二等でない切符　芳　子
軸
肩書が二等に乗せない人にする

歳暮

河井庸佑選

奥さんに内緒の歳暮いるつらさ　礎　山
ご夫婦が飲めてお歳暮酒にする　征　也
まだ来ない歳暮をあてに買わずおく　鎮　也
予想せぬ人から歳暮届けられ　佳　女
御届けの歳暮は派手にベルを押し　アキラ
木枯しの後へ歳暮が追うて来る　双　楽
お歳暮に縁のないのが来てあわて　英　詩
酒のまぬ俺に歳暮の一級酒　祥　月
掛声でおわる歳暮の廃止論　軒太楼
安いサラリーから高いサラリーへ歳暮　大六　秋月
どこどこがまだねと歳暮の指を繰り　誓　二
歳暮もふえて立候補すると決め　多蘭子
お歳暮のかさで誠意を疑われ　七面山
お歳暮へ野心の端もチラつかせ　白　汀
むりをした歳暮と母にようわかり　芳　子
自家用で里からお歳暮持つて来る　魚　山
銀行の歳暮がとどくいい身分　遊　仙

今年から歳暮をもらう席につき　洛酔
お歳暮へ我が子をたのむ世辞をいい　英子
数の子を歳暮にもらう程の地位　どんたく
歳暮のはしりが届く事始め　初甫
のし紙を剝がしてお歳暮一つすみ　勾門
歳暮もらいなれした礼をいい　摩耶
お歳暮にもろた塩鮭はでかく切り　天人
主人帰れば叱られますと歳暮取り　光道
デパートの歳暮で無事に居ると知り　梁水
歳暮にはカサの大きなものにする　一路
商魂は歳暮の街を活気づけ　季賛
窓越しに隣も歳暮する話　無閑
お歳暮もはりこんでおく就職難　弥生
課長への歳暮は美人の妻が持ち　勝子

佳

知恵のないお歳暮がとどき　古方
お歳暮でやつとご縁をつないどき　健太郎
年ごとに歳暮をへらす三代目　恵二朗
箱入りを買えば歳暮かと聞かれ　頂留子
お歳暮のリストを去年と較べてみ　十九平

人

私の価値を計算する歳暮　秋月

地

歳暮には縁ない孤独の職に就き　保夫

天

お歳暮にボーナスのすね噛られる　章雅

軸

借金のことわり兼ねた歳暮くる　礎山

やりくり

若柳潮花選

やりくりのくらしにかかる手内職　弥生
やりくりでひずめの音を聞きに行き　どんたく
やりくりが十円値切る主婦の腕　洛酔
不意の客ママは上手にもり分ける　英子
やりくりへしまつ屋さんの智恵を借り　保夫
深窓に育ちやりくりなど知らず　勝子
これつぼちの金でとやりくり馬鹿にされ　遊仙
デモするなやりくり学資に添えて書き　芳子
やりくりの衣裳肩行短かすぎ　鶴声
やりくりの下手な夫婦でよしとする　暁明
やりくりに汚職の金へ目をつむり　無閑
桝の手でフツトやりくり考える　初甫
やりくりの言葉のあやがもつれて来　里風
やりくりの皺寄せ小さい卵焼き　千翁
やりくりの寝物語りを子に聞かれ　宵明
やりくりのつく間は旦那さんなさん　藤波
やりくり上手思わぬとこに穴があき　摩耶
頼母子をとつて入院費へ廻し　十九平
やりくりを見せぬ涼しい顔作る　恵二朗
やりくりはビジネス家計簿堅し　勾門
やりくりの毛糸は縞に編む創意　隆子
やりくりの疲れを妻に見せず済み　礎山
すぐ返すつもりやりくり穴をあけ　鎮也
やりくりへ姉のせこはん着せられる　佳女
急患へベツドやりくりするナース　季生
ベツドまだ明日のやりくりねり直し　甦光
やりくりは覚悟の上の意地に負け　梁水
義理欠かぬようにやりくり気が疲れ　慶彦
やりくりは慣れてあわてぬ十二月　素身郎
やりくりがうまくしぶちんとも云われ　秋月
どこでどう工面したのか妻の智恵　祥月
やりくりに店の飾りを変えてみる　軒太楼
やりくりにへそくりの無い台所　代仕男
やりくりがついたかあれまり云うて来ず　悦子
どうやりくりしたのかモーニングで出掛け　七面山

佳

やりくりに秘策があつた大手筋　庸佑
黄昏れて来てもやりくり帰らない　無聖
やりくりへ伯父伯母従兄みなまわり　和宏
やりくりで買うたピアノで眠られず　紫
皆さんのやりくりお聞きするテレビ　柳子

人

やりくりに走るキヤデラツクやも知れず　古方

地

やりくりの助太刀母が置いて去に　瑞枝

天

へそくりを作るやりくりばかりする　健太郎

軸

やりくりがつかず晦日の鐘を聞く

☆柳界展望☆

奈良白藤学園の三周年記念川柳大会に出席した
（左から）薫風、静馬、舟遊諸氏

（橘高薫風担当）

▼麻生葭乃先生（奈良県）は生々庵主幹のBKからの川柳放送を聞かれ斯道発展をよろこばれている。そして「秋も深まるというのに生駒の家では虫の声が皆目聞かれません、農薬の関係でかと思うのですが、どうしたことでしょう。」

▼富士野鞍馬氏（東京都）は十一月三日、第三十六回京浜川柳大会の席上での第二回川柳文化賞贈呈式で、名誉ある川柳文化賞を受賞された。

▼第五回岡山市芸術祭参加川柳大会が十二月三日山陽新聞社七階講堂で開催。兼題—玄関・灯竿選—抵抗・十九平選—忘れる・弓削平選—あたたかい・久良志選—瀬戸大橋・恵二朗選、（各題二句）特別対談—三太郎、風来子両氏

▼築山快夢起氏（ハワイ同人）から若本多久志氏宛に—いま市郡政府老人問題対策委員会の調査の仕事をしております。楽園の住民にも金銭では解決のつかない多くの問題があり、各家庭の六十歳以上の方をたずねては調査をやっています。

▼大坂形水氏（大阪市同人）の令息が十一月二日、新大阪ホテルで華燭の典をあげられた。おめでとう。

▼川柳能因三百号ならびに桜崖句集出版記念、福島県下川柳大会は十一月十九日（日）午前十時から白河市円明寺かどや旅館で開催。

▼宮城野創刊満二十年報告夢助忌句会は十月二十二日（日）午後一時から仙台市小田原泉一—五、故浜夢助翁居で開催。

▼本誌十月号に掲載のはちのへ川柳社（八戸市）の創立満三十五周年記念全国誌上川柳大会を併せて、このところ東北地方の川柳会の歴史ある催しが引続き開かれることになりお慶び申し上げる。

▼西宮市民文化祭協賛の第二回川柳作品展は百五十名の新旧作家による二百点近い作品が出展され極めて盛大に開かれた。川柳塔関係では、路郎先生、生々庵先生の軸をはじめ、白柳、香林、小松園、万的、静馬、春巳、一栄、舟遊、きさ子薫風諸氏の作品が出品された。

▼備前川柳社十月例会は十月二十二日横山一声居で開催。楢原竜泉氏の古稀の祝賀会を予定していたところ十月十九日に踏切事故のため急逝された由、謹んで哀悼申し上げます。

▼川柳「河童」創刊号が十月一日大阪市西成区南吉田町九一阪口愛舟方番傘河童倶楽部から発行された。定価百五十円。

▼清水白柳氏（大阪府同人）は十月十五日出雲市へ。尼緑之助氏還暦句会に出席、帰途鳥取県赤碕へ立寄られ本年度路郎賞受賞作家森田布堂氏と交歓、賞品を手渡された。句会は八十名程の出席者があり盛会であった由。

▼米沢暁明氏（大洲市）は十月十八日子供会指導委員研究協議会に出席のため富士山麓国立中央青年の家へ。「御殿場で富士の見えない日がつづき」

▼脇田勇氏（大阪同人）は十一月十三日午前三時四十分逝去。（七十一歳）元大阪市教育委員長で第一回大阪市民川柳大会に尽力された。喪主は梅子未亡人、哀悼。

はげぬ・かぶれぬ白髪染
男まえ理容
環状線寺田町裏駅南一丁

▼八木摩天郎氏（堺市同人）は十月十三日胃の全快を自祝して夫人同伴十和田湖へ。観光の旅は盛岡、仙台を経て十五日帰堺された。「十和田湖の水よ酒になれと師を偲び」十一月五日には鳥取県砂丘から奥津温泉などへアベック旅行「鳥取の砂丘の馬車も久しけれ」

▼尼緑之助氏（出雲市同人）は十月十三日義兄の急死、十五日は還暦川柳大会、二十一日令息の結婚式と禍福相重なり、忙しい十月だったと。

▼阿部佐保蘭氏（東京都）は十月七日徳富蘇峰先生記念除幕式に参列、同席の同志社大学長住谷先生にカリカチュアを描いて戴かれた由。「燦として旭ケ丘に光るもの」

▼傍島静馬氏（高槻市）は十月二十二日奈良の白藤学園「葦の会」川柳大会に川柳塔を代表して祝辞を述べられた。

▼藤井明朗氏（島根県）宅に近火発生して大いに驚かれた由。

▼山田季賛氏（高槻市同人）は十月二日からの三日間労働研修講座受講に神戸へ、十日の体育の日には紀三井寺、粉河寺、四天王寺と巡拝、二十二日は山科の元慶寺、三井寺、石山寺へ。「紀三井寺南天著を買つて見る」また十月十四日ふあうすと本社句会に出席、昭和四十二年一月三日より始まった句会出席数が、この日で二百回になったとのこと。

▼羽原静歩氏（守口市同人）は町会の有志と十月十七日修善寺温泉へ清遊、箱根芦の湖、大涌谷など観光された。芦の湖畔で「高圧線芒の風を聞いている」大涌谷にて「掌を合わす延命地蔵は霧の中」修善寺にて「夜叉王の涙がしみる苔の色」

▼村上春巳氏（奈良市同人）は句集「鹿」の売上げ代金を東大寺整肢園の不幸な子供達に寄附された。

▼濱辺暁童氏（愛媛県同人）は十一月八日から十日まで鹿児島市で全国広報研究大会があり参加、時間を活用して帰路は神話伝説の露島コースを経由される由。

▼宮口笛生氏（奈良県同人）は柳誌柳茶屋に「破る子がない儘障子張り替える」の句を自筆発表された。

▼石原青竜刀氏（東京都）の夫人が輪禍に会われて死亡された。哀悼申し上げる

▼櫛部いさむ著回顧十年「宇部はよいとこ」B6版三〇二頁、随筆、川柳、俳句、商法など多彩の内容の好著。非売品ではあるが、三百円以下のご寄附をいただくと一部お送りします。これは宇部市提唱の常盤公園内の明治百年記念造園に献金される。申込所は大阪市東区糸屋町二、大坂形水宛。

▼菱田満秋氏（東京都同人）は一菱商事という新会社を設立、専務取締役に就任された。旅行斡旋等幅広く営業される由。

▼満生拝山氏（ハワイ同人）在布六十一年—帰化しても祖国日本がなつかしく—古行李あけりや明治の匂いする—拝山。

▼山内静水氏（竹原市同人）十一月二十三日に生駒の葭乃先生を訪問、路郎先生の遺筆や葭乃先生、アート様のご染筆をいただき家宝がふえました。三宅不朽氏の入賞祝賀会や静水氏と二三枝さんがともに十一月号で巻頭をとるなど二重三重のよろこびにひたっておられる。

▼田名部修三氏（西宮市の番傘同人）が十一月十三日逝去された。告別式には清水白柳氏も参列。

▼山陰川柳大会が鳥取県東伯町で十一月三日開催、日満、茗人、一保、布堂、新雪、弘朗、独歩、明朗、祥月諸氏の川柳塔同人が参加して盛会。兼題総合優勝は八木千代さん、二位は石垣花子さん、三位は小林由多可氏、特別課題は林瑞枝さん。

▼水粉千翁氏（倉敷市同人）は十一月十二日に開催された鷺羽川柳大会に中島生々庵、小石主幹ご夫妻の出席をよろこばれ、とくに指導者としての生々庵主幹の人格に深い感銘を受けたとのこと。なお薫風も出席、盛会だった。

▼高木夢二郎氏（川柳人主幹）から—不二田一三夫氏がかって標語によく当選されていたことを思い、あの素晴らしいセンスを川柳塔に盛りこまるようにと激励

本社 十一月句会

会場　自安寺
六日　午後六時

菊匂う十一月句会である。今月は句会づかれのする月だ、文化祭の名のもとに。
他柳社の友情出席の多いわりに自社の出席率がわるい、よろしく願います。
多久志氏の柳話は近来のヒットだった。結婚披露宴のテーブルスピーチの見本を数種示めされ会場は明るいムードに包まれた。
今どき天地人などおかしいというむきもあるが、佳作や三才は、ことばに出さぬ短評の役目を果しているともいえよう。
今月のNO・1は新鋭田中笑風氏の句にかがやいた。

（河井庸佑整理）

出席—与呂志・古方・知恵・静馬・双楽・遊仙・白柳・好郎・笑痴・瓢太・柳志・公輔・烏荘・誓二・多蘭子・頂留子・県吉郎・宣介・水客・白溪子・たつみ・継之助・一路・天笑・喜風・庸佑・生々庵・天樹・喜酔・一舟・芙巳代・多久志・一栄・文秋・三司・笑風・勝晴・野迷路・静歩・いさむ・観岳・喜一郎・清人・千梢・金三・恭太・喜恵・小松園・奈良子・季賛・あいき・一三夫・恒明・凡九郎・弓彦・吸江・葛城・形水・葉子

席題「食　欲」　児島与呂志選

食欲に絶食やでと聴診器　笑風
食欲がないから酒を飲むと言う　三司
食欲の秋へ女目をつむる　弓彦
かろうじて食欲だけは持ち続け　千梢
恋の初歩まず食欲でためされる　芙巳代
老いの坂食欲薬で加減する　喜酔
食欲に負けてスタイルあきらめる　たつみ
お腹の子が食べますのと呆れさせ　誓二
食欲の秋飼い犬も負けず食い　喜風
左利き食欲がないように見え　白柳
無芸大食ああ人生はのどかなり　生々庵
おばあちゃんまたたべ過ぎて叱られる　恭太
食欲のない日を犬に引張られ　水客
食欲もなくてという口よく動き　喜恵
余命いくばくせめて食欲なくすまい　生々庵
里帰り三日も食べぬように食い　多久志
胃袋と勝負食欲別にして　天樹
食欲と別にお義理の箸をつけ　与呂志

席題「芸　術」　戸田古方選

浸食の岩芸術のように浮き　白溪子
ここまでは芸術ですとストリップ　誓二
ホホウこれが芸術かと眼鏡ごし　静歩
これが芸術やと云うてはるさかい　凡九郎
芸術展ただふんふんと見てまわり　葛城
ゴツゴツゴツ芸術はここにあり　弓彦
芸術に遠く人形の眉を画き　三司
芸術祭参加テレビで肩がこり　恭太
芸術へ執着学歴捨てて来る　白溪子
芸術の名で良識に立ちむかう　水客
芸術に凝り大胆になる女　清人
芸術もここまで来れば馬鹿ならず　季賛
ズボンに折目なし芸術家がすわる　白柳
有名な絵と聞かされてそう思い　恭太
芸術家に生まれ二代目よう継がず　いさむ
芸術家孫の落書大事がり　天笑
面を見つめている芸術家の無口　白柳
千年も前の手法が真似られず　一舟
芸術家案外商売うまいなり　吸江
芸術展終りの方は素通りし　県吉郎
特選にいよいよ芸術わからない　弓彦
芸術へ打込む顔は別に持ち　白溪子
芸術の切売りをさす秋という　水客
盛り合す皿パセリも芸術味　知恵
芸術の秋にモデルはよく肥り　あいき
芸術にむかない子供とされない　恒明
芸術を解し風船を天に放す　宣介
ART・IS・LONG・BUT・I・II　古方

席題「デ　マ」　福浦勝晴選

大阪のデマ新幹線で着き　笑風
デマ飛ばす知恵は野心もほのめかし　与呂志
大物のデマ北浜をゆさぶりぬ　恒明
栄転のデマへ嬉しい慌てよう　柳志
ライバルを陥さんために放つデマ　瓢太
デマですと笑顔静かに否定する　失名
言訳をするから本当にされるデマ　恒明
デマ好きが自分のデマへむきになり　一舟
デマ飛んでそれからデマでない二人　一栄
犯人がにやりにやりと読んだデマ　天笑
井戸端で尾ひれのついたデマが飛び　千梢

才たけてデマ吹き飛ばす思慮があり　金三
再婚のデマ結局は結ばれる　公輔
そこからのデマは創作だとわかり　与呂志
弁解をするからデマが輪をひろげ　一三夫
黙殺という手でデマを粉砕し　一三夫
善処した政治の奥にデマがあり　静歩
プラスマイナス計算をとばすデマ　白柳
北浜でデマを拾つている喫茶　宣介
死なはつたデマに涙が笑い出し　生々庵
デマとして聞き捨てならぬ話聞く　季賛
評判を妬んだデマにくすぐられ　笑痴
デマ作り今日は消してる記者十年　一路
本当になつて婚約発表し　恒明
動ようする心をデマが又ゆすり　あいき
デマを消すあかしに土産役立たず　一舟
デマであれかし旧友の汚職記事　多久志
旗色へあれはデマだと消して行き　葛城
デマだわと意中の人の噂消し　誓二
出所はついに判らずデマふくれ　瓢太
デマではなかつた不渡りつかまされ　好郎
デマにして落着させる権威筋　古方
神さまはタイ・ポンのデマ信じない　天樹
栄転のデマを信じて見たくなり　たつみ
デマだろうと思つていてもつい信じ　瓢太
デマがとぶ口より早い赤電話　一義
デマだよと心かくした目が笑う　頂留子
コスモスは地に這いデマを跳ね返す　天樹
女ありデマの大きさに負ける　水客
売れつ児になつたはデマが飛んでから　勝晴

兼題「オアシス」　辻白溪子選

オアシスに美酒あり金のかかるとこ　軒太楼
付けの利くオアシス親父彦左に似　章雅
ふるさとにオアシスがあり砂丘ゆく　日満
療養を世のオアシスと達観し　どんたく
オアシスの朝風呂グループ皆そろい　阿茶
オアシスのような職場の昼休み　双楽
駅前のオアシス丁ちんぶらさがり　天笑
オアシスがここにもあつた子の寝顔　一路
オアシスでいそがぬ旅をもてあまし　たつみ
ぼくだけのオアシスコーヒ飲みに出る　形水
オアシスへ迷路がつづく砂の山　天樹
絶景があるオアシスの長い坂　天樹
うつむいたままオアシスの恋がゆれ　継之助
高熱の夢オアシスを求めてい　多蘭子
オアシスの緑をスモッグが汚し　文秋
オアシスでキャラバン同士の荷もばけ　誓二
オアシスで夜の更けるまで踊りぬき　金三
オアシスに見えたネオンにだまされる　弓彦
オアシスの三日月男飽いてくる　恭太
オアシスという名の喫茶よくはやり　公輔
女房の待つオアシスへ急がない　天笑
オアシスに時計忘れてきた帰国談　多蘭子
オアシスに似た噴水に肩を寄せ　白柳
飯場にもオアシスがある昼の酒　勝晴
旅便りオアシスに似た句を添える　水客
オアシスの公園に来てなやまされ　あいき
オアシスはホテルのネオンに取り巻かれ　弓彦
スモッグがもうオアシスにとおかず　恒明
オアシスを求めて孤独バーの隅　一栄
マンションがオアシスらしい午前二時　喜酔
オアシスのように好意を泌みこませ　水客
日雇いのオアシスと言う縄のれん　与呂志
オアシスを我が家と知つた旅づかれ　吸江
子の馬にされても憩える我が家なり　清人
オアシスへ真すぐ事務のひまが寄り　たつみ
オアシスで隊商気分をかえて発ち　白溪子

兼題「声がわり」　傍島静馬選

声がわりまだ母親と風呂に入り　阿茶
声変りするパツションへ落ちつけず　礎山
声変りズボンの折目気にしだし　章雅
声変りしても父母ちやんと呼び　どんたく
声変りぼつぼつ髪の毛伸ばしかけ　若芽
声変りする程やれと師はきびし　弘美
声変りたのもしがられいやがられ　悦子
太鼓の皮破つたような声変り　吸江
風邪気かと思たら何や声変り　一栄
暫くはマスクかけたい声変り　喜風
声変りニキビを潰す日がつづき　天樹
女みな美人に見える声変り　瓢太
ゲーボーイかくし切れない声変り　千梢
声変り小犬の鼻にうたがわれ　水客
声変り亡夫をそこに見る思い　多久志
音楽の時間が厭な声変り　恭太
生意気になつたと思う声変り　白柳
声変りした娘へ家中気を使い　たつみ
声変りして人生を軽ろんじる　水客
声変り冷やかされてる電話口　弓彦
声変りニキビの数もふえ始め　公輔
なぶられる事が嬉しい声変り　柳志
合唱をぶちこわしてる声変り　庸佑
声変り引出し皆鍵をかけ　多久志

声変り背丈もぼちぼち親を越し　白溪子
むつかしい質問をする声変り　天笑
空白がつづく日記へ声変り　三司
無愛想になつたと思う声変り　吸江
子の声へあなたと呼んだ襖越し　葛城
声変りガキ大将の座を譲り　弓彦
声変りしてもお八はまだねだり　あいき
声変りほんとに困つた女形　与呂志
アイシヤドーそつとしている声変り　一路
声変り風呂場へ親も寄せつけず　瓢太
声変り少女小説物足らず　柳志
ポケットに何か秘めてる声がわり　多久志
声変り鏡の前もながくなり　双楽
危険信号のように吾子も声変り　凡九郎
声変りそろそろ親を馬鹿にする　恭太
電話口我が子と知らずかしこまり　葛城
声変り言葉少なく用を足し　小松園
おやじより貫禄づいた声変り　静馬

兼題「雑役」　菊田いさむ選

角帽をきせたい夢の雑役婦　多久志
雑役も服は同じ女事務　金三
キヤリアをいわずだまつて雑役夫　古方
雑役へ親子五人がしがみつき　静歩
雑役を終えて番茶の啜る音　笑風
雑役のスネを噛じつて全学連　一三夫
雑役がお花の先生とは知らず　白柳
雑役のように会長よく動き　文秋
雑役に黙々として日日好日　勝晴
小回りがきいて雑役たのまれる　古方
雑役を後生大事に五十過ぎ　悦子
雑役の父にすまないボーリング　若芽
雑役を気軽う受けるお人好し　与呂志
更生するのだ雑役で第一歩　恒明
雑役に新入社員が教えられ　金三
西成の雑役チユー一ぱいでけりが？　千梢
雑役と言わず庶務をやつてます　静馬
高女卒訳は言わない雑役婦　恭太
雑役のかせぎ結構ためている　千梢
雑役もさん付で呼ぶ人不足　天笑
雑役の名で捨扶持を恥とせず　水客
雑役でよし妻子と食うてゆけるなら　清人
雑役も衣冠をつける京の秋　一路
雑役夫浮び上つてきた事件　天笑
雑役に惜しい器量は訳があり　阿茶
男もうこりこりですと雑役婦　章雅
雑役へ妻のこころの手弁当　勝晴
筆とれば雑役なかなか達筆家　小松園
雑役の物知り社では人気者　喜風
雑役夫社長の椅子にも座つてみ　葛城
雑役も明治の匂う几帳面　遊仙
雑役夫一パイの酎に老いていき　笑風
碁にだけは雑役社長に容赦せず　吸江
ワンマンと言われ簿も持つ社長　好郎
雑役で住込み後家の操立て　清人
雑役も鼻息荒い労基法　阿茶
学歴を無視して雑役から使い　白溪子
白足袋でする雑用を見詰められ　水客
雑役の父に誇れる東大生　奈良子
人生の果雑役として老夫婦　多久志
福耳に垢をためてる雑役夫　笑風
サロンパスぺたぺた貼つて雑役婦　いさむ

兼題「回り道」　川村好郎選

師の句碑を訪うに異議なし回り道　日満
いつまでも別れたくない回り道　悦子
虫の音につい誘われた回り道　若芽
質屋へと言えぬ女の回り道　東天紅
回り道してまで割前貰つてき　小松園
赤い灯を避けて夜学の回り道　多久志
十円の安価に主婦の回り道　喜風
回り道無口な恋を育てる　天樹
ツキのない人生まわり道ばかり　一三夫
ニユカーが自慢で寄つた回り道　県吉郎
回り道して貸金にそつと触れ　吸江
影法師だけでも見たい回り道　小松園
メーターがカチツとあがつた回り道　恒明
ツケがきく店でわざわざ回り道　多久志
回り道して恋の間をもたし　千梢
雨上り靴を気にして回り道　白柳
回り道それから恋が急テンポ　静歩
目と鼻のとこ回り道する工事　恒明
回り道無学の愚痴をもう言わず　白溪子
もあい傘なにいといましよ回り道　生々庵
定年が無情に待つてた回り道　弓彦
回り道余情を月が見てしまい　芙巳代
早退を妻に内緒の回り道　あいき
回り道駐車違反をしてしまい　恒明
回り道したネと夫婦の眼が笑う　水客
まわり道したから萩の径があり　多蘭子
絶交というほどでない回り道　宣介
回り道無駄でなかつた今日の地位　清人
回り道もよし忠告やめにする　好郎

いずも川柳会
四十周年記念
川柳大会

―尼緑之助還暦祝賀

王紫

謝辞をのべる尼緑之助氏

十月十五日正午、出雲市体育館地階ホールで、この記念すべき大会が開催された。

出雲市駅の一番ホーム改札口には市当局の肝入りで掲げられた「いずも川柳会四十周年記念大会歓迎」と白布に朱書された文字が鮮やかだ。

大阪から清水白柳氏、鳥取の河村日満氏は前日に到着され一泊して一番乗りをされた。兵庫、岡山、鳥取各県からもご出席を得て七十四名、投句者が五十六名というご参加があった。司会は久家代仕男氏、大会委員長の原独仙氏は尼緑之助会長の功績を讃え、清水白柳、柴田午朗、大西八歩諸氏の祝辞、そして緑之助会長の謝辞と、大会気分は最高潮である。

いずも川柳会は、大正十四年「川柳たかせ会」として生まれ、昭和二年「川雑蛟川支部」その後「出雲支部」となり、「たかせ会」は「大地吟社」を経て今日まで四十年間緑之助会長の熱意を中心に柳道を歩んできたのである。五周年と二十五周年記念大会には故路郎先生のご出席を得た感激は忘れられない。

選者諸氏のご披講も熱がこもり、懇親会では各氏の隠し芸があり、午後七時に散会となったが、また会える日を楽しみに、あのお顔やあのお声にさよならをした。

各地の皆さま、ご支援ありがとうございました。

（各題の三才と選者吟だけ発表）

席題「点」　**河村日満選**

ひらがなの手紙読みよい点を打ち　舞吉乃里子
財産を点で数える差押え　岬月
裏口が合格点を押しのける
点線の道新聞がすつぱ抜き

席題「動く」　**永尾永断選**

金に動きそうな心をふと恥じる　舞吉
腹の子が動いて愛の不毛なる　酔歩
利に動く商人の眼になつており　岬月
よく動く口に結局誤魔化され

席題「便乗」　**古割舞吉選**

便乗の女だんだんこわくなり　午朗
便乗の値上げに怒る脱穀機　岬月
便乗に里の人情教えられ　昌
秋無情米に便乗して値上げ

席題「トラック」　**藤井明朗選**

トラックの速さ人波を気にしない　緑之助
トラックを降りてやさしい父になり　昌
道幅は言わずトラック憎まれる　午朗
事故多いトラック恐いものに見る

席題「気分」　**横山一声選**

たつた一言気分の変る枕元　好江
二級酒をマダム特級酒で飲ませ　八歩
菊一輪ベッドの気分ときほぐし　千代
特効薬だけではなおらない気分

兼題「追憶」　**大西八歩選**

追憶へ母の小言が胸にしみ　秀酔
追憶は羽田を発つた日に終り　星歩
追憶は惜しい男だつたと云う　白鷗
追憶へ苦しい事はみな忘れ

兼題「スケール」　**浜田久米雄選**

スケールの小さい悪事をして案じ　午朗
石橋を叩きスケール小さくなり　晃男
永山に似たスケールと恐られ　白揚
スケールの巾だけ男よく動き

兼題「続く」　**小西無鬼選**

オツペケペまだ生きていた全学連　鳳城
引退の花道拍手まだ続き　祥吉
よい事が続き人相までかわり　白柳
まだ続く談義へ欠伸かみころし

兼題「耳」　**柴田午朗選**

聞かぬ耳聞く耳母の使い分け　昌
庖丁もやはり聞耳立てており　岬月
美人らしいことだけを聞くイヤリング　白灯
農地開放以来果報な耳でなし

兼題「大安」　**尼緑之助選**

離縁した日も大安と後で知り　無閑
大安に離婚届けも一つあり　雲平
大安のそば杖を食うひとり旅　京斗
大安の文字めでたさを盛り上げる

兼題「流行」　**清水白柳選**

はやるから着るとは女いい身分　京斗
幼稚園うちもお多福風邪もらい　芳子
流行に合わぬ個性と気がつかず　祥吉
話題みな流行にして髪赤し

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

篠山川柳会　小畠無聖報

月給で食つて百姓の魅力説き　隆男
たよれるは何の魅力もない家内　与志
悪友が一本提げて染めに来る　近江
六十才まだ髪染めてみる若さ　初音
爪染めた手で釣銭が放り出され　古仙
未だ叱る親あり喜し五十才　永断
叱られし母の追憶かみしめる　寿栄
お代りの催足銚子ふつて見せ　枝葉
催足へ居留守は隣が知つており　実世
一年の内職冷蔵庫となり　八陣
気短かの虫が理性を突き破る　茂広
気短かな夫に今日まできたえられ　花月
気短かはもう独酌で失礼し　無聖
図書館のベストセラーは手垢つき　一筆
湯かげんへ垢をたのしむほどに癒え　みのる
大仏の垢トラツクで運ばれる　梅枝
体操のおかげ無病の古稀迎え　泰舟
体操にしぼり私立の名を挙げる　可住
黙々と体操をして時期を待ち　ひか平

南大阪川柳会　金井文秋報

内心を知つて家政婦ひまをとり　好郎
田舎者それでよいのさ大地ふむ　一舟
明日の天気を確かめている出入口　小松園
内心はどうであろうと借つて来る　弓彦
心とは別な手荒い声になり　柳宏子
内心をただす瞳に嘘がない　滋雀
闘志燃やせばあつちこつち痛み　文秋
燃え果てた恋の別れは灰の色　双楽
同居人実はひそかに頼る人　金三
燃え跡にポツンと残る冷蔵庫　吸江
高層ビル大地も強いなと思い　白柳
燃える事知らぬ女の眉険し　あいき
燃える胸抱いて新婚旅に立ち　貞山
それからは付合いうわべだけにする　古方
一適の水銀地に落ち混じわらず　芙巳代
クイズ程勉強してと叱りつけ　智子
大地からおもわぬ小判出て迷い　生長
老化した頭クイズに試めされる　形水
孫の足天眼鏡で刺をぬき　喜風
燃えるだけ燃えた火事場へポンプ来る　静馬
ほんとうは貰いたかつた心付け　一栄
離婚沙汰これが一ト時燃えた仲　章雅
女無言一番刺のある構え　野迷路
燃えつくすまで待つて話をつける肚　若芽
老眼鏡の上から内心見抜くよう　綾女
内心を誰にも言わぬ未亡人　肖二
刺のあるように聞いたは吾が僻み　喜仙

王造川柳会（大阪市）　西出一栄報

舐め廻すような男の瞳を感じ　柳宏子
ボクシングカラーテレビで見る血汐　一栄
宙吊りのロープウエーに乗り合わせ　静歩
一点の差で優勝をとり逃がし　井平
マイペース守つてその差気にしない　古方
値下げした差額下請背負わされ　一舟
地図を見て来たが昔と変りよう　双楽
国の名が変つて戸迷う世界地図　綾女
海山名所地図の知識が役にたち　千歩
ややこしい地図へ国訛り昏れかかる　六竜子
スマートなつもりでミニにブーツ履き　章雅
スマートな建売りボチボチ雨がもり　好郎
スマートになつたと退院ひやかされ　誓二
控え目なスマート女に女惚れ　千梢
すき間風秋しんみりと思い知り　句念坊
自動車のすき間を縫うて走る犬　肖二
偽つて心にも吹くすき間風　文秋
夏はやつぱりそれだけに涼しいすき間風　天真
子沢山寝息にとけるすき間風　みね子
感情のすき間へささやきかけてみる　凡九郎
病人の神経すき間の風を云い　形水
這うた児に畳のすき間教えられ　白柳
台風の夜は明けたらしい戸のすき間　鬼遊
只今と玄関の声に安堵する　喜久堂
廊下ウロウロ只今父になるところ　中性尼
只今が空虚にひびく妻の留守　あいき
二へん目も今出ましたと云う出前　好郎

岸和田川柳会　高橋操子報

お困りのご様子ですなと高利貸　かつらぎ
サーカスの一座体重ないらしい　たけし
お気軽に来させて高い品を売り　武助
茄子漬夏バテもせず食える朝　加仙
そのままになつてる貸を思い出し　操子
シャツターへ笑つた顔で待たされる　美恵子
密命を呑む下請のつらいとこ　三志郎
社長より特秘が回る非常措置　白光子

どんぐり川柳会（羽曳野）　川村好郎報

女同士気炎あげてるビヤガーデン　秋水

意気投合粗茶がビールにかわる　客　雅子
湯上りのビールが酔わす旅心　幽玄
二人してかなえてほしい墓の前　ひろみ
霊園も鑑賞するよな代となり　浩平
せつかちが墓を作つて長生きし　茶坊
近代化進んで墓地もせまくなり　秋春
夏の夜墓地もデートの場所となり　夕子
万国博見ずに朱文字が一つ消え　一歩
有名人死して墓まで見栄を張り　柴天
再婚の決意を持つて墓まいり　凡太郎
二人の遺児アーリントン墓地に何を知る　雅子
たまさかのビールの味は妻のもの　都
勿体なやビールの泡を吹き落し　隆蔵
湯上りのビールの味が喉鳴らし　啓吉
ビール飲み終えて星空美しき　重夫
療友が退屈してる午后の庭　九鬼
退屈を盆栽一つ夢たくし　ネホ子
新開店退屈してます午后三時　八郎
秋の虫墓も一緒に聞いており　いわを
アツと云う間にホステスが飲むビール　好郎

まるべに川柳会（大阪市）川村好郎報

舌打ちをしても上司の命は命　瓢太
舌打ちも知らずお喋りまだつづき　泉睦
上衣正して銀行ドア重く押し　立児
もてあます子供であつてなお可愛い　幸子
甘えたら舌打ちしつつ買うも親　一世
もてあます程にお金の欲しい日々　寿子
既製服の上衣写真でよく目立ち　扇里
ホロ酔いが他人の上衣着て帰り　茂児
その上に舌打ちしたと叱られる　好郎

あすなろ川柳会（大阪市）川村好郎報

美容体操照れくさそうで真面目なり　慶之助
鼻息の強さそれだけの男なり　尤三
鼻息のほとぼり冷めた頃出向き　弓彦
定刻で退社残業で家につき　ゆきを
鼻息の荒さへ黙ってたら去んだ　素郎
女郎蜘蛛となるもホステス生きるため　好郎

堺川柳会（堺市）和海草春報

二本の矢向けて日本へ上陸か　流月
台風を知ってか蟻もせわしそう　草春
台風が来ない内から板をうち　暁年
面当てのように労組の吊し上げ　金三
面当ての顔師直のようにみえ　春翠
金もうけ内容なんか云うとれず　紅月
内容はすべて銀行知りつくし　遊仙
内容も聞いてもらえずことわられ　天笑
内容証明封も切らずに家に居ず　小松園
灰皿へ商魂たくましくマーク入れ　季賛
灰皿は知ってる前夜の荒れ模様　青香
ビヤホールの灰皿置いたホームバー　静馬
灰皿をくれと寝床の不性もの　双楽
灰皿へしみ消す手に決意みせ　宏子
灰皿に恋の終りを残し行き　茂美
灰皿も大衆食堂というアルミ　好郎
つぎが来て夜明けも知らず有頂天　千万子
有頂天の小唄を三味の口が過ぎ　六竜子
有頂天妻も相手にして呉れず　摩天郎
有頂天地球は二人だけのもの　笑痴
転落の絶壁に立つ有頂天　白柳

若芽川柳会（堺市）吉岡青香報

少しずつ娘になつてゆく仕草　藻介
教養の一つ一つに出る仕草　草春
釣場での仕草は箸で間に合せ　四嶺
今あるは恩師の助言抱きつつ　流月
親なればこそする助言うるさがり　青香
何気ない仕草に血筋意識させ　笑痴
合槌をうつ格好も親ゆずり　天笑
あの時の仕草に思いあたるふし　千万子
中風の仕草を真似た子を叱り　遊仙
精進へ戦後生れはそつけなし　抱月
精進のつらさ忘れる優勝旗　たつお
精進料理さも重そうに小僧さん　春翠
交差点叱る巡査にひげがあり　摩天郎
エンストへ巡査手を貸す交差点　双楽
お登りをうろうろさせて交差点　暁年
警官がにらみを利かす交差点　左久良

ウイロー社句会（ハワイ）快夢起報

手放しにほめる女の有頂天　雪女
有頂天ひいき角力の勝名乗り　エス子
試験パス子よりも親が有頂天　万里歩
初孫へ爺さん婆さん有頂天　泉水
息子パス教育ママは有頂天　蒼蛇楼
老らくの恋に酔いしれ有頂天　快夢起
一目惚れ男一匹有頂天　三石
鏡三つ母抱きあげて有頂天　拝山
有頂天眼の色までが変に見え　暁舟
有頂天雨にぬれぬれまだしやべり　紅溪
神代から思案は首を垂れるもの　カロ女
妻逝きて思案に暮れる老いの身の　紅茶
駄句ひとつ思案重ねてやつと出来　紅溪
老らくの恋思案して思案して　魔花麗
燃え残る色香へ思案の未亡人　浅太
思案する程でもないが石畳　内海
思案にも尽きてお嫁にやるときめ　あき坊
団欒へひびくパパの思案顔　浮草
割り切れぬままに思案のひとり言　峰円

交通局句会（大阪市）与呂志報

風呂敷の中にも想い出みやげもの　緑雨
口下手の世辞はプツンとあとが切れ　凡々

晩婚の感想聞けば笑うのみ　鉄児
通夜の席ダイヤをかくす手を重ね　一乃字
安泰をゆさぶる昔のスキャンダル　孤舟
あの娘ならこれも達者と縫う仕ぐさ　誓二
妻も子も居て安泰な僕の城　継之助
追求の角度を変えて茶をすすめ　正則
ボーナスの内緒がばれてつめよられ　三十四
愛隣地区に年中行事が一つ増え　鉄舟
アリバイのたたぬ浮気のマッチ箱　秀峰
入院をしても浮気の虫とれず　和樽
浮気もう別れられないとこまで来　拙詩凡
浮気した頃の話へやいてすね　藤太
闘病の妻に浮気を進められ　洛酔
浮気していたと仲居の久しぶり　茂凡
テレビから学ぶ浮気のABC　本蔭棒
命まで捨てるスピードとも知らず　笑風
スピードが低下赤字を出す市電　武松
スピードについて行けない老夫婦　年秋
お駄賃でスピード上げた肩叩き　楽々
スピードを押し出すようにペタル踏み　喜酔
スピードについて行けない日が続き　文清
再会の望みたち切る早い潮　漁人
迷惑をかけぬ積りのさようなら　松亭
蔭の身のつらさここからさようなら　小柳子
グッドバイしてニュースかじりつき　のぼる
さようなら白いうなじが眼に残り　胡蝶
引越してもう散歩道きめている　春巣
金借りる手真似へはつきり返事する　与呂志

大鉄川柳会（大阪市）　辻白溪子報

悪友を不仲にさせて恋おわる　水客
屑色を器用に抜いて母は縫い　杜的
鉋屑普請の大きさは知らず　白溪子
進学へハンドブックの数がふえ　季賛
先輩の描くマイホームに聞き入りぬ　求女
娘をみんな嫁かせ気軽な旅をする　飛鳥
盛り場の朝を屑屋が先ず漁り　永断
好意みなさかさにとつていた不仲　たつみ
灰色の街描くその手に熱をこめ　宗悟
釣竿に鼓動伝わる孤を描く　耕三

川柳たましま社　水粉千翁報

本復の秋刀魚の味をかみしめる　麗水
けなす身もいつか歩んだ遠い道　梁水
蟻がふと蟻の死骸へ立ち止まり　八笑人
公約は公約だけの青写真　よしを
陽が落ちる頃を蟻でも知つており　三林坊
めくら判捺すのに廻り椅子がいり　三辛堂
悪政をなすしやもじの列長し　扇水
お宅さん私立ですかとご挨拶　林鶴
誘われて見たい奇麗な蟻地獄　貴志朗
よんどころなく一匹の蟻となり　柳子
盲目の愛に花瓶が涸れている　千翁
策戦のとおり男が怒り出し　寛子
挨拶を交して蟻の恋があり　鼓草
妻と子のうれしい策にのつてやり　朝二
パフたたく女演技を内に秘め　秀子
この墓地を流石は避けて青写真　里風
心の灯だけは消すまい点字読む　旭峯
策戦の涙もまじるネオン街　好女

12月の句会

玉造川柳会（大阪市）

時　十一日（月）午後六時
題　ひねる・じわじわ・納め
所　玉造交差点南百米　大阪信用金庫

南大阪川柳会

時　二十日（水）午後六時
題　まこと・名誉職・同感　ハミング　イクノ区北生野町一ノ二五
所　（大萬川柳発表）　金井文秋堂近く　乘願寺

南海川柳会

時　二十一日（木）午後六時
題　特急・適合期・あいまい
所　ナンバ高架下　親和クラブ

高知川柳社（高知市）　川竹松風報

泣き声を背に働く朝を出る　伸
ほろ酔の声がもつれる赤電話　文子
グループの若さ歌声楽しそう　古城
声変り子供の殻を脱けかかり　淳
遺言をテープに父の声を聞く　勝子
貧しくも家に平和な声こぼれ　蟠蛇
親戚のはしとわかつた旅の連　舞子
親戚という気安さの服を脱ぎ　伊津志
親戚がもうう少し欲しい選挙前　みどり
親戚の寄る目出度い日悲しい日　大破
遠まわりして人生の味を知り　美和
退職金貰わぬ先にあてにされ　竹荘
千恵子抄よむ娘の細い背を案じ　紅雨
連勝の記録をはばむ日の斗志　一人
階級と別に心はおれが上　桂緑
飲んで気を晴らす若さはすでに失せ　松風
あきらめていますと妻は貧にたえ　竹青
台風が来るかとチョコの手をやめず　さとみ
結婚をするのは息子同意する　武司

備前川柳社　目賀芳月報

宿敵のもぐらに精農が挑み　胡風
宿命にすなおもぐらは土を掘り　草二

日食と知らずもぐらが顔を出し　秋月
コンクリート頭上に知らぬ日のもぐら　のぼる
食うためにもぐらは地下を掘りつづけ　伊久野
未亡人世間がうるさいからと逃げ　一声
世間みて来てあたたかい故里の風　芳月
三男は世間知らずの子に育て　久米雄
子沢山育てただけが世間なみ　幸仙
賞金の使途を心配する世間　飴ン坊
世間みた子の意見には逆らわず　しん平
風評へ世間は怖いものと知り　浄美
世間体作りうそまで言うて生き　柳子
お見合いを世間はきめたと噂する　竜泉
博士でももぐらを防ぐ術がなし　正州
ちよつとした過失も世間は見逃さず　水仙
豊作を地下のもぐらも感嘆す　一美
気やすめの案山子の目玉こわく書き　三六
片言で云う口答えにくまれず　楽天

オーエスケー川柳会　大坂形水報

色づいた柿の実ひとつ冬近し　真人
気象台予報はずれて喜こばれ　博泉
親からの信用だけにしがみつき　孝夫
台風もシュートカーブでやつて来る　豚児
嘘までも信用されて子は慌て　亜成
馬鹿正直と云われて今日の地位築き　洋児
去んでから領収書を確かめた　一扇
葉は褪せど力の限り花の色　神田
台風がそれて雨戸の釘の跡　常夢
偏屈で信用されてる縄のれん　仙夢
信用は不可抗力を口にせぬ　形水

川柳あしなみ句会（姫路市）保西岳詩報

答弁はゆつくりピント外しとく　水客
横文字のメニュー素早く裏返し　河童
真昼の恋熱帯魚に似た水着　紅月
山行きのリュックを母が持つてみる　比呂史
今年から膝小僧が黒くやけ　実男

「雅号ぶっちゃけばなし」（38）

きさこ ないとう

・内藤きさ子・

別にぶっちゃけるようないわれのある雅号でもありません。ただ本名の漢字が読みにくいので平仮名にしたまでです。本名は「宜左子」と書きます「宣」ではなく『宜』です。でも仲々これを「キサコ」と読んでもらえません。ヨサコとよまれる方が多いのです。でもこの本名にもちょっとしたいわれがあります。女学校三年のとき戸籍名の画数は寿命が短いとかいわれて、姓名学の先生から改名してもらいました。そしてこの「宜左子」は「先生」になる名前なんだそうで、何の先生になりそこねたのか知りませんが毎日を平和な主婦として過しております。しかし皆さんから変った呼び名だなあといわれるたびに、ちょっぴり得意でないこともありません。　主婦（四十六才）

無神経で良し尾虫の胸に針　光雨
歌まつりピントに照れた顔も見せ　但洲
熔接の火花額の汗おとし　笛珠
エリートを自負孤独にたえている　岳詩

川柳塔松江支部柳翁忌句会

コトコトとラーメン秋の夜をつくり　鳳人
値上げ反対署名のペンをしかと持ち　ゆきえ
値上りへ倒産もあり秋の風　山我
来て見れば旧家淋しく屋根も落ち　巡歩
ラーメンの派手な丼街のすみ　唖蟬
値上げなど知らぬ寝顔のあどけなさ　正朗
会長は音痴嵐のアンコール　芳子
故郷へ続くすみきつた秋の空　鶴丸
せち辛い浮世身内に裏切られ　晃男
弁当が来てから会長煙草吸う　天痴人
藁屋根は旧家大臣産んだ家　祥月

かがみ川柳社（岡山県）池田古心報

記憶の減退字引膝の下　老骨
生字引地位をとわない座におかれ　文女
生字引村長さんも訪う日あり　古心
老いらくの恋特ダネにされており　雅子
特ダネのように野党が暴露する　秋月
素人が何を知るかと目が笑い　稲平
素人芝居楽屋の蔭で糸を引く　あつき
村芝居下手が居るので尚見たし　清水
素人を困らすものに法のうら　今日平
性分で隣りのことまで世話をやき　晴女
怒るのは損と知つても腹が立ち　蛙浪
性分が神を信ずる気になれず　たつよ

南海川柳会（大阪市）辻　圭水報

苦面して造る資本にある社運　季賛
同窓会ビリが社長になつていた　和郎

資本金出してくれはる見込みよう　宏子
お小遣いもとで稼ぎがアルバイト　金三
体力を資本帰りのコップ酒　東雲楼
亡き父の投資がやっと日の眼を見　句念坊
同窓会まだ先生ははっぱかけ　圭水

むらくも川柳会（島根県）　明朗報

肝心なとこで口下手よう言えず　祥月
口下手がコップ酒からよく喋り　清夢
口下手は口下手なりのセールスマン　勇
口下手が手は八丁ほど稼ぎ　文子
口下手を救う言葉に骨が折れ　英子
街燈に車の交差助けられ　孝華
街燈も顔そむけたい酒の酔い　一郎
街燈が見え屋根が見えマイホーム　昌
鼻声になると無心だなと気づき　明朗
鼻声の時ほど可愛い妻になり　美栄
世の中は広いねそつくりの人がおり　白汀
タレントに似た人うまく稼ぎだし　加代
鼻声の妻に用心してかかり　芳子
腹立てた相手へ口下手あわてだし　正朗

いずも川柳大会　森山健太郎報

尼緑之助還暦祝賀記念

先祖から続く餅つく日はきまり　久米雄
初恋の女に酔が触れたがり　永断
トラックが着いて市場の朝があけ　一声
追憶のどの頁にも酒があり　静馬
神様と予約済ませた大安日　日満
背の子が泣くまで続く立話　弘朗
フイルムが切れてご気分だけ残り　明朗
耳に手を当てて親馬鹿ぶりを見せ　水客
重宝な耳を警戒して話し　晃
学芸会出番待つてる長い耳　専正
いい話聞こえる方の耳を出し　真奇
卒業の耳は都会の事ばかり　秀人
満載のトラック苦心の露地を折れ　瑞枝
トラックが軒下けずる程走り　新雪
本日休診先生も風邪を召し　静水
売る為にある流行と気がつかず　快哉
流行へ三人同じ柄を着る　不折庵
流行は支えのほしい髪形　正治
ミニルック真面目な恋をしてました
いい話耳まで赤く聞いている　竹雪
耳傾けて聞いてはならぬ事を聞き　紫
福助の耳画用紙からはみ出して　祥月
大型のトラック図器に見えてさけ　河南
トラックを追越した処で事故にあい　春軒
トラックに新居へ向かう荷がつまれ　軒太楼
トラックで山のお嫁の荷を送る　壮
平凡が無事に続いて真珠婚　礎山
どこまでも続けてくれと襲名し　松風
次ぎつぎに揚がる花火が湖を染め　澄水
十五年奉仕続けた感謝状　一郎
海開き埃を立ててバス続く　青三
よく根が続きますなと冷やかされ　章雅
よく動く孫に老母は汗に濡れ　礼次
雲動くかつてヘルンの見た雲が　巷雨
動かずに居れど突込む殺人車　万栄
まめによく動く嫁だとおだてとき　柳子
動く歯を抜いてしまえとピンセット　独仙
成功に期待をかけて動くメス　愚童
かんじんの孫が動いていた写真　無鬼
精薄児童話の夢がまだ続き　政巳
献血に町民善意の列続く　不動
その先を続けて読めと寝たつきり　友康
お目出度が続き家計を赤くする　ゆきえ
打ち続く不倖に耐えた立志伝　真須良
出稼ぎの故郷へ続く空あおし　鉄花人
いつまでも続く労資の平行線　朱扇
先取点早くも郷土わきかえり　房夫
点数の足らぬところは裏で行き　法泉子
点在の島が絵になる瀬戸の旅　代仕男
便乗をしたトラックが飛ばしすぎ　天痴人
便乗の値上げ給料追いつけず　君枝
京のよい夫婦へ便乗小さくなり　鶴丸
便乗の洋行出世にプラスする　初子
便乗に弁当箱が邪魔になり　房夫
便乗のヒッチで通う分校場　やすを
便乗のその上煙草まで貰い　健太郎
便乗がバス代よりも高くつき　万古人
大安の日も運ちやんは髭をそり　可住
大安の出鼻をくじく鼻緒切れ　光教
大安の契り目出度く朝の膳　雨舟
大安に心許して事故にあい　小茶坊
大安へオールドミスは株を買い　保夫
嫁ぐ娘の荷が大安の朝を出る　巡歩
年代の差も一致する大安日　篤司
どの暦にも大安とある安堵　秋月
大安に離婚届けも一つあり　雲平
人間のスケールの差が出世の差　義人
発掘の規模しのばれる土台石　草丘
スケールをとやかくいつて出し惜し　干久良
智恵の輪のようなスケール企画され　大鳥
スケールは故人になつてから知られ　紅彩
追憶の想いあらたな原爆忌　芳正
老境のよすがとなつた写真帳　苔思
憶い出に押され押されて来てしまい　李朋
追憶のみじめさは子に聞かせまい　正
追憶の柄を娘に着せて見る　舎人
追憶は遠く風紋踏んで行く　法泉子
くされ縁でも追憶は美しい　酔歩
流行のテンポ横目に又はらみ　岩雄
ふんどしに流行などはない相撲　勝美
続くのがそろそろ怖い手切金　章峰

腹切つた医者が気分を聞きにくる　正朗
気分よく飲んで他人と手をにぎり　水仙
病床に気分はよいかと友が来る　湖楽
いい気分水入らずの敬語ぬき　斉兆
たまの旅妻新婚の気分出し　清流
鼻歌が混り気分のいい報らせ　加代
押えてはお灸をすえる点をつけ　茂人
体操の順位コンマの差で続き　白汀
オール3点の子にまずまずの父でいる　孤呂二
雰囲気に溶けて歌つた安来節　暢柳

うしお川柳会（岸和田市）加仙報

埋立てて去年の海がもう見えず　青子
去年からえくぼが消えていた不倫　一骨
物価高去年の家計簿出して見る　かつらぎ
お月様に云い訳をして花盗人　多佳子
罪にならぬ事は何でもして稼ぎ　瓢人
罪のない人だと足らぬをおだてられ　美咲
本物が見えるおもちやが誘う罪　三志郎
大家族パンとごはんが同居する　すみれ
戦争に負けてこの子はパンが好き　虹子
フラツシュへ罪の意識もない手錠　白光子
腰弁をサンドイツチのハイキング　加仙

駒つなぎ川柳会（大阪市）岸南柳報

原理運動子へ振る親のプラカード　規一郎
狭量な上司惜しい人を去らし　宏子
アルサロの付けが自慢の不幸者　悟郎
湯豆腐の上で花カツオのダンス　恭太
秋風が風鈴ならす通夜の軒　潔
赤い羽根思わぬ処で酒になり　竜雲
なるほどと云えて人生つがなく　柳信
松茸の香り千両見てるだけ　詳恵
水虫へまた効きそうなコマーシャル　小路
眠らせぬ思慕が憎いと思う夜　みよ

浮気しておいでと妻にみくびられ　進之助
妻の肩触れ合うて見る今日の月　良平
滝までを紅葉でかざる秋日和　喜正
紅葉を程よくぬらす滝しぶき　育園
薬ほど初物匂い土瓶むし　多津緒
小説を地で行く男とらわれる　ひでを
よく釣れる浮子に月の出邪魔をする　南柳
遅咲きの朝顔亡母を偲ばせる　秀代
満山紅葉神経痛が疼いてき　小松園

ふじかげ短詩睦会　藤本礎山報

姑さんエプロンで居る宵祭　二朗
すだれ越しあの子のエプロン見えている　朱実
エプロンをかけておしやまが寝ている　勲
新婚のエプロン鼻唄すだれ越し　敏彦
お揃いのエプロンかけて幼稚園　喬
エプロン買つてと母がねだつてる　カッチン
台所エプロンかけて好きな人　民子
新妻のエプロンかける幸を知り　きち
鼻唄でエプロン誰を待つのやら　梅野
炊き出しへエプロンがけの火事見舞　敬子
新婚のエプロン姿まだ馴れず　保夫
母ちやんのエプロン案外よく似合い　プッコ
とき色のエプロンの可愛いい幼稚園　久美
エプロンの母にあまえてみたい気も　コツコ
嫁姑エプロン楽しい台所　千代子
エプロンへさあこれからのははの顔　恵子
エプロンの母が僕ちん落着かせ　和宏

これまで小中学生
エプロンの母娘料理の趣味をもち　秀雄
エプロンを買うにも女決めかねる　克秋
姑も嬉しいエプロンよく動き　明
台所のエプロン倖せそうな音　総
エプロンが朝陽迎える窓を開け　政子
マーケットならエプロンのままでい　照夫

亡き母のエプロン姿が懐かしい　多鶴子
水いらず妻のエプロン幸を呼び　秀峰
土産包装エプロンがけのよく稼ぎ　宏司
御馳走が出来るエプロン母がかけ　千鶴子
エプロンをかけた母さん美くしい　冨夫
一夜漬けエプロンがけの母の味　長男
衣裳みなタンスにエプロンよく動き　勇仁
エプロンの母が看護の窓に見え　英子
お料理を手伝うエプロン楽しい日　加代
よく動く妻のエプロン波立てず　吉春
エプロンの母が倖せ創り出し　鎮也
うたた寝のエプロンおそい帰り待ち　久人
色エプロン嬉しいひと間の新世帯　和久
やりくりの日々にエプロン耐えて生き　忠志
エプロンをはずした母の肩をもみ　征也
洗濯のそばでエプロンでない母がくれ　佳女
お年玉エプロンでない母がくれ　礎山

高級洋菓子
アトラス
堺市役所前　TEL(2)2334

・2DK・

★耳にジングルベル、目に狂乱の商店街。本誌三度目の十二月号である。

★宝くじを買っている連中の、あの何かにすがるようなファイトのない目つきを見ているとイヤーになる月でもある。

★本号から目次の下へ「私論・柳論」を設けることにした。まず北川春巣氏にご登場をねがったが、この欄は穴埋めではなく権威あるページとして本誌のカラーの一つとしたい。執筆陣は古豪新鋭を問わず力作をもって飾りたい。なお広告の都合で目次が表紙の2へいく場合は休載することもある。

★本年の十大ニュースのトップは、世紀のワンマン宰相吉田茂氏の死であろう。十月二十日午前十一時五十分、神奈川県大磯町の私邸でなくなられた。三十一日に戦後初の国葬。

★吉田さんは川柳家や漫画家に人気があった。そういう意味ではユーモリストのNO・ワンであろう

「長寿の秘決は？」

「人を食うことサ」

これは漫才作家の領域である。

★ぼくは吉田茂氏に一万円の貸し？がある。というのは昭和二十八年に東京の議員会館内にあった日本道路美化協会募集の道路美化標語に一等（賞金一万円）と二等（五千円）に入選したことがある。二等の賞金と副賞と賞状は送ってきたが、一等のほうは副賞と賞状だけで、かんじんの一万円は送ってこなかった。どうせ読んでくれないのは百も承知で吉田さん宛にもサイソク状を出した。

ゴウを煮やしたぼくは社会党のある議員さんに頼んで調査してもらったところ、末端のチンピラがつかいこんだことわかった。賞状をくれたのは当時の乱造某大臣だが、責任者は吉田総理であるから手紙を書いたのである。当時、機会があるごとにこのイキサツを夕刊紙に書いたものである。

—吉田さん三振しても引っ込まず—豆秋。

☆本号で合本が二冊、ぼくの貧しい書架におさまるわけである。

「川雑」が九冊だから、かって編集していた映画雑誌のカサにもう一と息だ。

みなさん、よい年をお迎えください。

（不二田一三夫）

常任理事会

十一月四日六時から本社で常任理事会が開かれた。議題は忘年句会と新年句会をどうするか、ほかである。

忘年句会は例月どおり、新年句会は第一か第二の日曜日のヒルにきまった。短冊の交換と四十二年度の本社句会賞授与と全出席表彰から、有志による新年宴会を自安寺の会場で催すことになった。宴会の会費は七百円程度である。

川柳塔社発展のため、こんごは時に応じて常任理事会へ参事の方々にもご出席ねがうことになった。常任理事会は毎月四月開催。（四日が日曜日の場合は三日）なお一月の常任理事会は休会。

しっかりやれよとご寄付くださる方がある。これは理事長があずかり、有益なことに使わせていただくことになった。

同人吟が〝近作柳樽〟の新鋭陣にやや押され気味ではないか。という発言があった。他社からの評にもそういったものがあり、選者も作家もこれは謙虚に心すべきことで、このような爆弾発言は同人誌ならではのものであろう。

去る十月にNHKから放送された生々庵主幹の録音を聞く。

日ごろ特別のご協力をたまわっている方々に、表紙使用ずみの色紙を贈って感謝の微意を表した。

出席—古方、白柳、生々庵、文秋、栞、小松園、薫風、好郎、一三夫諸氏。

八時三十分閉会。

本社忘年句会

日時　十二月八日（金）午後六時から
会場　自安寺（妙見さん）
　　市電千日前下車スグ北側
　　（電話211・14478番）

柳話　戸田古方

兼題
「小説」　本多柳志選
「吉日」　森下愛論選
「土」　阿万万的選
「メーカー」　菊沢小松園選

席題　三題（題と選者は当日発表）各題三句
会費　百五十円
★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話大阪㊀3985番

1月の兼題　「タスート」　「猿」
　　「新市街」　「名門」

二月号発表（12月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　川村好郎選

課題吟（各題5句以内）
「雪」　森本法泉子選
「難題」　有働芳仙選
「娘」　冨岡淡舟選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

三月号発表（1月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　川村好郎選

課題吟（各題5句以内）
「先着」　小畠無聖選
「真相」　石倉旅風選
「チラシ」　太田良子選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価　百二十円（送料六円）
半年分　七百五十円（送料共）
一年分　千四百四十円（送料負担）
昭和四十二年十一月二十五日印刷
昭和四十二年十二月　一　日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　大陽印刷株式会社
発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十二年十一月二十五日　印刷
昭和四十二年十二月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔　十二月号

定価　百二十円（送料　六円）

世界の通が憧れる…

WHISKY DISTILLERY・SUNTORY・

国際銘柄

サントリー

■インペリアル・ローヤル・オールド・角瓶
カスタム・ゴールド・ホワイト・レッド

料理も電話も 551 ここがいちばん

TEL（641）551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬莱 焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー